

様式で主張されることがあります。

この種の主張は、要するに考へ方の各段階を、それ／＼十分にふまない結果、明確な知識のない結果、つまり無智なるが故に、始めて大胆に發表することができるのであつて、大胆に言ひ得ることは、いはゆる「盲蛇物におぢず」といふ、むしろ恥かしい状態の表示であることに氣がつかないのです。

精確に考へる頭があつたら、大抵の場合、そんなに輕卒に物が言へるものではありません。輕卒に物が言へるのは、つまり考へる段階手續を省略してしまふからです。病氣のことにしても、同じ名前の頭痛とか、胃カタルとか言つても、その性質、程度、原因に種々あつて、それは又生理的要件、精神的要件、環境的要件、生活の方法等の、複雑で且つ絶えず變化しつゝある要件に關係して、いろいろになるものであるから、醫師の診療でも、藥品でも、或る一二種類を用ゐて、十分に奏効することは、容易に期し難い。その醫療の職能、知識、技術、投劑の

性質、目的、効能等を考へ、その箇々の場合との關係を考へるならば、何等専門的知識のないもの、僅少な經驗に基いた、常識的な意見などは、容易に信用を置き難いものであることがわかりませう。専門的知識のために、却つて誤ることもよくありまして、その場合に、廣い常識の大へん有用な役目をする必要がありますから、常識は決して排斥すべきではありませんが、それは飽くまで材料的、補助的の知識であつて、精確な本質的知識でないことを知らなくてはなりません。經驗は知識の材料になるものですから、固より貴ばなくてはなりません。しかし前にも言つたやうに、經驗箇々のまゝでは知識にならないもので、どうしても知識の要件に従つて組織されなくてはならないのです。冷水浴をやつて健康になつた、酒をのんで不道徳家になつたといふのも、同一状態の下に、同一經驗をくりかへして、いつも同一結果になつた時、この状態の下でこのやり方をすれば、この體質の人には有益であるとか、有害であるとかが、始めていへます。次にあ



らゆる人の、あらゆる状態の生活で、あらゆるやり方をして見た上で、始めて一般的に有益であるとか、有害であるといへるわけです。実際にはそんなにまでしないでも間に合ふ場合が多く、またそんなにしてゐる暇のない場合も多いのですが、従つて又その經驗的知識の性質が極めて不確實不安心なものであることを承知して、十分謙遜に慎重にしなくてはなりません。それはいふまでもなく、自他に對してできるだけ害毒と浪費との少い、健實安定な生活を生み出すためにです。

#### 七、問題の要點と解決の材料

私どもの智力が無意味に發達したものでない以上、出来るだけその智力を働かせて、生活の價値を發揮しなくてはなりません。つまり前に言つた、自然に起る疑問の方向の指示するところに従つて、できるだけ手落ちのない解釋を求めなくてはなりません。

問題が若し答へを要求する疑問の形で現はれた場合には、その問題の意義その

ものをまづたしかめてかゝることが必要です。その必要なことは、受験の際のことと思ひ起して見ればわかりませう。答へなければならぬ要點は何か、それをはつきりとつかんでから解答にとりかゝらないと、よく勞して効のない間違ひを致します。

反對に、人に答へを求める場合には、答へさせる要點をとり違へることの斷じてないやうに、その問題を提出しなければいけないのです。これは精確な知識を要求する人の、當然の用意でなければなりません。自分よりも智力の低い、幼稚な者に向つて、何か言ひつけたりする時には、殊にこの用意が必要で、むしろ義務といふべきです。間違へられた後から、「そんな意味ではなかつた」「そんな積りではなかつた」といふことを、相手に責める言葉に使ふことがよくありますが、これはむしろ粗漏であつた自分を責める言葉になるべきもので、或はその程度に無智であることの告白とも見るべきでせう。さうしてその結果は、思想と言葉の



非常な浪費になります。なせなら、勢ひそのほんとうの「意味」「つもり」を説明し直して、更に又ほんとうの答へや、實行を求めなければならぬからです。

それ故に、問ふものにしても、答へるものにしても、問題の要點と範圍とは、まづ第一にはつきりさせなくてはなりません。その次ぎには、その解決に要する材料を、その要點と範圍との與へる方針に従つて集めるのが順序です。この材料に間違ひがあると、解答も亦間違ふわけですから、一々の材料が確實なものであることを要します。

この時、考へる材料になる第一のものは、いふまでもなく自分の直接の經驗、即ち現に見てゐる直觀的の知識と、覺えてゐる過去の知識とです。現に見たものは、ごく確實で、少しも間違ひのないものゝやうに、一寸思はれてゐますけれども案外さうでないことは、「幽靈の正体見たり枯尾花」といふ俳句や、「忽ち驚く大蛇の路に當つて横はるを。刀を抜いて斬らんと欲すれば老松の影」といふ詩など

が説明してゐるやうに、むしろ有り勝ちなのです。毎日見る太陽の大きさや色が朝晩と日中で、大へん違つて見えますが、太陽そのものが伸びたり、縮んだり、紅くなつたり、白くなつたりするのでないことは、誰しも知つてゐることでせう。

ですから、自分で現に見た事實だからと言つて、十分安心してはなりません。第一にしつかり注意して見なくてはならない。第二に幾度も見なほさなくてはならない。第三に違つた場合に於て、種々の見方をして見なくてはならない。第四に一定の條件を設けて、一定の觀察をくりかへす、即ち實驗をして見なくてはならない、第五に他人の經驗や、研究を借りて、不備を補ふ用意がなくてはならない。實際いつもこの通りのことをする必要も、餘裕もない場合が多いのですが、正しい考へ方の材料として、精確を要する場合には、これだけの手続きをとる必要があるのだといふことを、心得てゐなくてはなりません。

#### 八、正しく物を見ることはむづかしい



ほんとうによく物を見るといふことは、なんでもないやうであつて、實は大へんむつかしいものです。平常よく氣をつけて、自分の觀察の結果をしらべて見ると、どんなに「見落し」の多いかに誰しも驚くでせう。前から知つてゐる種類のものであれば、「あゝあれだ」と言つて片付けてしまふ。今見たものが前に見たものと、どんなに違つてゐるかを見ずに棄て、しまひます。全然新奇なものであると、ただ「新奇」そのものゝ驚きに打たれて、感情の昂奮のために、精確な觀察の眼は働きません。或は違つたところだけ眼について、似て居るところを見落します。しかし大抵新しいものは、そのどこかに以前の經驗と似たところのあるものであるから、その似たところだけに注意して、外の事を無視します。コロンバスがキユバの島に始めて着岸したとき、土人たちはその船を見て、大きな鳥が飛んで來たと言つたさうですが、こんなことはわれ／＼が常にやることなのです。

「色眼鏡をかけて物を見る」といふことを申しますが、道徳的に悪い心で人をわ

るく見る場合でなくとも、私どもは知識的に廣い意味の色眼鏡で物を見ることを免れがたいやうに出來て居るのです。いつも既に持つて居る知識をあてはめて、外から來る新しい刺戟を受取つてゆきますから、どこまでも以前の通りの型にはまつたやうに、新知識をも造りかへてまゐります。自分に似せて穴を掘るのは蟹ばかりでない、人間も自分に似せて、知識の殻を造ります。それ故特に努力して、純白な心で物に對し、精密に異同の兩點を觀察するやうにしないと、ふるい殻の層が厚くなるばかりで、新しい知識の世界をひらくことができません。その一生の損得を考へれば、恐ろしい結果になるわけですから、私どもは、日常刻々の何でもない生活經驗の中にすら、何等か新發見をする態度と、それを從來の知識に連絡させて、一つの組織にする努力とを持つべきです。

それでも自然物に對するときは、割合ひ冷靜ですから、たとへ新發見をしないまでも、又見落しの多い代りに、押し曲げて見ることもまづ少いのですが、人と



人との関係の場合には刺戟が強く、感情の興奮が伴ふことが多いので、非常に鋭い注意を拂ふ一面、又眼鏡の色が大へん濃くなる、時どすると曇つてしまふといふことを免れません。従つて人の観察には、いやが上にも、冷静に、公平に、純直に心を保つやう、強い努力をしなくてはなりません。この用意を持たない、輕卒な人が、いかに世間に多いか、而てその結果、いかに他人を傷け、自分を傷け、社會生活を亂すことが多いかを十分顧るべきです。

#### 九、精確な知識と數量的要素

知識を精確にするために必要な觀察上の用意は、できるだけ數量的の要素を加へるといふことです。たとへば自宅から學校まで「あまり遠くない」といふよりも「およそ二丁ぐらゐ」とか「五丁ぐらゐ」とか、「そんなに時間がかゝらない」といふよりも、「普通の足取りで五分ぐらゐ」とか、「十分ぐらゐ」とか、方角なら「東」とか、「東南」とか、「南」とかいふ風に見ておくことです。わが國民には科學的頭腦

が乏しいと言はれますが、その科學的頭腦といふことの要件の一つは、數量の考へのはひることにあります。

或る人がドイツに留學してゐたとき、下宿してゐた家の女中に、一度日本風の米飯を炊くことを教へたところが、その後いつも同じやうに、上手にたけるので、どうしてさううまくたけるのかときいて見たら、「水の分量や、煮る時間などを計つて書いておいて、あとはその通りにやるからです」と答へられたので、その人は大へん感心したさうです。教育が普及してゐるからとはいふものゝ、わが國では高等女學校を卒業した主婦でも、なか／＼さほど精確なことはやりません。教育の高い低いよりも、その教育のしかた、或は頭の働き方です。

消費を節儉して、しかも生活の能率をあげるには、どうしても科學的知識を用ゐる外に途がありません。私どもの生活の中で、科學的知識の殊に最も必要なのは臺所ですが、ところが、わが國の臺所ほど、科學的知識のはひらないところ



はないでせう。すべてが漠然たる習慣と、よい加減の目分量ですから、する人はその時その時に當つて、一々口傳實習をしなくてはならず、しかも出來がムラで、一定の所要効果を見ることができません。これでは節約のしようも、能率のあげようもないのです。

近來文化生活といふ言葉が亂用されて、何か少し新しいことをやると、すぐ文化生活といふ名をつけます。まことにばかげたことですが、しかし生活の方法を學術的知識によつて定めることをも、文化生活と名けてよろしいならば、わが國大多數の家庭生活は、文化生活と反對の、自然生活、或は野蠻生活と名けられる状態にあるとしなければなりません。而て文化生活が採用せらるべきものであり、野蠻生活が排斥せらるべきものであるならば、私どもはできるだけ早く家庭生活を科學化して、勞力、時間、材料を節約すると同時に、健康上、修養上、もつと大に有効なものとするべきでせう。

その第一着手はまづ臺處に數量的、計算的方法を加へることです。これは豫算決算を精確にして、生活の經濟的方針を定めるだけのためにも必要です。たちのわるい商人に、ばかにさ<sup>い</sup>ないだけのためにも必要です。

臺處に科學的方法を加へることは、單に目前の實際生活を有効に、正確にするばかりではない。一面には臺處の仕事が同時に學術的研究となつて、或は學術論文を草する材料も得られませう。少し以前には、高等教育をうけたものが、臺處のことで暇つぶしをするのは勿体ないなど、いふ婦人がありましたが、これは臺處の仕事のしかたを知らなかつたからです。少しの科學的方法を加へる注意があれば、臺處を極めて有益な、おもしろい實驗室、研究室とすることができると、又他面には發明發見の端緒を捉へる機會も、從來の因襲的方法に安住してゐるより、遙に多いことであらうと思はれます。

## 一〇、事實と解釋とを一つにしないこと



記憶となると、知識そのものが薄れてゐるのみならず、他の経験や、空想や、人聞きなどと混同する恐れが多いものですから、一層慎重な扱ひをしなくてはなりません。しかし最も注意を要することは、事實と解釋或は説明とを混同しないやうにすることです。尤も廣くとれば、事實と解釋とは根本的に違つたものでない。事實と言つても、個々の感覺的経験を、こちらの頭でまとめて作りあげたものである以上、事實もやはり解釋の一部と見なすことができませう。その作用は同じことでありますが、第一にその資料が違ひます、事實の資料となるものは直接の経験であるが、解釋は更にその事實を資料とするのですから、間接なものになります。第二にその態度が違ひます。事實に對しては、われ以外の客觀に存在するものを、こちらに受入れる態度ですが、解釋はその事實の意味内容を、こちらから持ち出して與へる態度になります。言葉を換へると、事實は客觀的に存在するもの、解釋は主觀的に作り出すもの、もつと強度な言葉を用ゐると、事實

はわが精神を以て動かすことのできないもの、解釋は自分の勝手に出来るものといふこともできます。従つて又第三に、事實は誰が見ても同一に見える性質のものですが(大体に於て)解釋となると、個人々々で違ひ得るものなのです。

解釋は自分の勝手にできるものといつても比較的話で、實は事實を離れた、無關係の空想を押付けてもいゝといふ意味ではありませんが、事實そのものに較べれば、たしかに主觀的な、自由の餘地が多いのです。従つて又實際に於て、随分事實をそつちのけにした、勝手な想像を押付けて、その事實の解釋とする危険が極めて多いのです。この意味に於て、知識の正確を求める私どもは、事實と解釋とを一緒にしないやうに、嚴密に區別するやうに心掛けなくてはなりません。これもやはり自然現象に對しては、冷靜を保ち易いから、従つて解釋も事實に即いた、公平なものになり易く、よし違つても害は少いのですが、人事關係になると、主觀的になり易く、従つて事實を離れた、勝手な想像を加へ易く、而して違つた



場合には、有害な結果を來すことが多いのです。ですから人間關係に就いて話でもする場合には、餘程氣をつけて、現實に存在する事實と、自分の與へた解釋説明との區別を、はつきりさせなくてはならないわけです。

ところが事實と解釋の區別をつけない人が随分見られるのです。むしろ自分のこしらへた解釋を、事實として他人に傳へる人があるのです。前のは單なる無智の状態ですが、後のは明かに「ウソ」なのですから、無智以上の知識的犯罪と言はなくてはなりません。

大正十二年九月一日の大震災の後の數日間などは、多數の人が事實に基かない空想小説を發表したり、人にふれまわつたり、而てそれによつて行動した結果、如何に慘澹たる、醜い非人道的状態をわが帝都及び附近に現出したことか、これは誰しも記憶してゐることです。歴史や傳説に事實として残つてゐる事件の中には、いかにあの種の空想小説の多いかを思はないわけにゆきません。あんな大

さなウソ(即ち事實でないものを事實とすること)でなくとも、小さなウソを事實として押付けられる經驗は無數です。

「あの人は自分の前で眉をひそめた。あの人は自分を侮辱したのだ」といふ話の前半は事實です。後半はそれに對するこちらの解釋です。この解釋は一つほかのない解釋ではない。盾をひそめる原因は面前の人を侮辱する意志の外にまだいくつもあり得ます。いくつかあり得る原因の中で、その中の一を選択し、決定するためには、さうきめなくてはならない理由を別に求めて來なくてはなりません。その手続きをとらずに、勝手に好きな一つの解釋を選択するのは、解釋として何の價値もないのであつて、その事實の解釋ではなく、ただ自分の好きな意見を押し付けたにすぎないので。解釋にならないことを釋解としてゐるところに、第一の無智を示します。それを事實と思ふところに第二の無智を示します。事實として人に傳へるところに第三の輕卒を示します。同時に人を誣告した犯罪を示します。



この種の過失と犯罪とは、上位の者が下位のものに、強者が弱者に對するとき、殊に多く起るのを發見されるやうです。何かしたことが、十分自分の氣に入らないやうな場合、さうなつた理由の説明などはよくきかずに、その者の横着とか、怠慢とかに、勝手に原因をきめて、頭から叱りとばす。さうした現象はざらにあります。強者の地位にある者が弱者に對するときには、精神の弛緩、放埒、自恣になりがちなものですから、従つてこんな人を害し、己れを害するやうな、無智の状態を示すことが多いのでせう。道理に物を言はせず、權力に物を言はせるわけですから、道理、廣くいへば知識の價値を輕蔑するわけになります。従つて智力の發達に對して、甚だ有害な態度と言はなくてはなりません。

#### 一一、意見と報道、想像と推論

事實と解釋とを外に向つて發表したときには、報道と意見といふことになりませんが、これは他人相手、又は社會相手のことですから、その兩方の内容、又相互

の異同に就いて、一層嚴密明確な考へを持たなくてはなりません。その報道は他人が意見を立てる材料となるべきものであり、又その意見は他人の生活方針に影響するものであるから、もしそれがよい加減な、不正確不公正なものであれば、他人を誤らせる結果を生じます。殊に始めから、他人の意見をそれによつて立てさせることを目的として報道をする場合、他人の方針を動かすことを目的として意見を發表する場合に於て、最も嚴肅な用意がなくてはなりません。

自分にとつて利益になるやうな、又は好ましい意見を人につくらせるために、わざと事實を曲げた報道をすること、純正でない意見を發表する例は随分あります。その中で殊に最も甚しいのは、低劣な商人の廣告でせうが、これ等の廣告に對して、私どもが如何なる取扱ひをしてゐるか、いかなる態度をとつてゐるかを考へて見るならば、不正な報道や意見の價値効果といふものがわかるでせう。

意見の基礎部たる解釋説明の内容となるものは、想像と推論とですが、この二



つもまた混同してはなりません。想像も推論も、外に在る事實でなくて、事實を材料として心の中に作り出すものであり、従つて新しい思想ではあるが、想像は必ずしも眞實であることを目的としない、従つて勝手な考へ方をして差支へがないのであるが、推論は必ず知識の眞實、正しくいへば合理的を目的とするものであるから、従つて眞實であるべき考へ方、即ち論理の法則に合つた考へ方をしなければいけません。それで想像の方は考へた結果に重きを置くが、推論に於ては、むしろその考へる途筋の方が大切です。人を興がらせる話の内容は想像でよろしいが、議論の内容となるもの、精確な知識の内容となるものは推論でなければならぬ。藝術の内容は想像であり、學術の内容は推論です。この區別をはつきり理解して、興味本位の場合にかたくらしい議論をしたり、知識本位の場合に勝手な想像を持込んだり、彼れとこれとを互に置き換へない注意をしないと、うちこわしになる場合があるのです。

## 一一、勝手な想像

想像も推論も、同じく精神の創造である以上、全然違つたものではないが、右のやうな特徴がそれ／＼にあるから、想像の方は自由で、従つて現實をいくら離れても差支へない。しかし推論はどこまでも現實的で、しかあり得る、しかあるべき知識であることを要します。月の世界で、兎が餅をついてゐるといふのは、月の面に見られる曇りの形からこしらへられた、おもしろい想像であるが、それが眞實であるとは誰にも信ぜられない。しかしその曇りが、以前に海底であつたらしい低い平原であらうといふのは、外の種々の観測の結果を材料とした推論であつて、眞實として信用される可能性を持つてゐる。従つて兎が餅を掲いでゐる話は、何等月に就いて實際的の解釋をする知識にはならないが、曇りが平原であるといふのは、月に就いての重要な知識になります。浦島の話はおもしろい藝術であるが、現實の世界では成立ち得ない想像です。



想像は現實に有り得べきことを要件としてはゐませんが、しかし眞理を發見する端緒的方法として大へん重要な心のはたらきです。ひろくいへば、想像も事實の解釋の一つであつて、ただそれが眞實である筈の要件をそなへてゐないといふだけであるともいへます。浦島の話でも、昔の人がいかに現實を解釋しようとしたか、その中に昔の人の、現實の人生の或る解釋、即ち一種の人生觀、乃至は哲學を見ることも出来るのです。むしろ藝術は勿論として、學術、殊に發明發見なども、鋭い、深い想像力が豊富でなくては出来ないと言つてもいいでせう。ただ眞を目的として知識を構成しようとする限り、想像だけに止まつてはならない、せひとも實驗に徴し、推論を加へて、現實的に可能であることの證明を與へなくてはならないのです。

合理的な考へ方の要件を少しも顧みない、自分勝手な想像を加へて、他人の言葉や、行ひや、事件の動機意義を解釋し、それを現實にあてはめて間違のないも

の、やうにふるまつてゐる人もあるものですが、正しい生活を送らうとする人は、注意してこの輕卒を避けなくてはなりません。この場合にもし心の純な人であれば、想像が中らなくとも、有害な間違ひをせずすむでせうが、不純な人であること、感情上自分の好きな方にか、又は打算上自分の利益になる方にか、都合のよい方に想像をこしらへてしまひますから、他人から見ると、大ていはおそろしく見當違ひな、しかも不愉快な解釋になりがちです。又正しい考へ方は、骨が折れて解決がおそく、その上實際は材料の不備なことが多いものであるから、従つてはつきりした解決のつかない場合が多くなりますが、自分勝手の想像をやる方は、持ち合せだけで都合のよいやうに組み立てるのですから、手早く、且つ明快に解決（しかしその人自身の心持ちだけの）がつくわけです、そこで勝手な想像で往く人は、他人が愚鈍に見え、自分の賢明をほこりたくなるのですが、しかし頭のあつた人から見れば、却つて反對なので、自分が得意になるだけそれだけ逆比例に、



輕蔑、憫笑、排斥を受けなければなりません。

### 一三、解釋と批評

大ていの場合、意見の中樞となるのは、批評と呼ばれる思想活動です。批評は解釋の基礎の上に立ち、解釋を完結させるものであると同時に、解釋の中には、既に批評の要素を含み、批評も亦廣義の解釋に外ならぬのですから、解釋と批評とは、これも同じ知識の働きの連続なのですが、併しやはり違つた特質を持つた、違つた作用ですから、これも混同してはなりません。

解釋は事實の内容を明かにすることを職分としますが、批評は物事の値うちをきめることを使命とします。批評にもまた種々の段階や種類がありますけれども、とにかく大体な言ひ方で、批評は値うち定めを中心の特質としますから、解釋よりもまた一層事實をはなれた、その人の考へ方であるもの、即ち主觀的なものと言はなければなりません。その點に於て、事實と解釋との異同と、解釋と批評と

の異同と似て居ります。

物事の解釋のし方と成績とは、その人の知識の力を示すに止まるけれども、批評のし方と成績とは、一層その人の人格の程度と働き方とを示す趣きがあります。批評は主觀的であるだけ、自由であつて、且つしやうやうに見えますけれども、實はその反對に困難なる仕事であり、又自由が多いだけ、それに對する人格的責任が重大であることを知らなくてはなりません。智力が乏しく、人格の低い人はこの理解を持たないために、事實の調査や、解釋の正確をよい加減にしておいて、早速批評を下しますから、その批評はまことに手早く簡單に出來あがる代り、また外れのでたらめになりがちことに氣がつかないで、得意になつて居るのが見られます。批評は空想であつてはならない、どこまでも現實的なものです。藝術にも批評はありますが、藝術の内容のやうに、自由な想像を描いて、その藝術の批評とすることは許されません。合理的な推論の途筋をたどることが要求されます。



合理的なといふことを言ひ換へるならば、事實と解釋との上に、十分な根據を持つた、法則に合つた、正しい考へ方といふことになります。或は逆はいへば、他人からその批評の理由を問ひただされたときに、事實と解釋と推論の方法を明示して、十分納得させるだけの用意がなければならぬといふのです。つまり何ひとにも承認さるべき内容を持たなくてはならない、誰がやつても同じ意見の成立つべき要件をそなへてゐなくてはならない。理由の備はらい、従つてその人一個だけの考へで、他人には了會されない批評を獨斷と言つて、知識上では排斥されて居ります。

智力の乏しい人は、事實の精確なことよりも、解釋のおもしろいことを重く見、解釋の正當なことよりも、批評の痛快であることを重く見て、正しいといふことを度外におきますが、智力の豊かな人は反對に、不公正な批評よりは、解釋の妥當を重く見、不妥當な解釋よりは、事實の精確なことを重く見ます。前述の通り、

解釋や批評は自分で出来るものであるから、その最初の基礎となるところの事實の精確を、まづ第一に重く見ることが當然でせう。多くの場合に、批評や解釋を他人からさくよりも、事實の報道を十分にして貰ふ方が、自分にとつて遙かに有益なものです。

#### 一四、批評の職能——自他の統一

批評は、何ひとの眼にもその通りに見られる事實ではなくして、批評する人の自由な精神から生まれ出たものでありながら、しかも何ひとにも承認せらるべきもの、いつどこへ持つて往つても、成立つべき性質を具へてゐなければならないものである。實はむつかしいのです。従つて最も慎重な、嚴肅な態度で取扱はなくてはならないのです。批評がなせさほご慎重嚴肅を要するものであるか、さほごめんごうな批評を、なせ人間がいつもしてゐるのであるか、なせせずに居れないのであるか、今少しその點を考へて見ませう。



批評の究極とする目的は、物に——批評の相手となり、題目となるところのものに、意義を與へ、値うちを與へる仕事です。意義を與へ値うちを與へるとは、廣く言つて、人生にいかなる關係を有し、いかなる位地を占めるものであるかを定めることであり、狭く言つて、自己(人格としての)の要求に如何に適合するか、如何に満足を與へるものであるかを定めることです。ですから「與へる」といふのは形式的に見ての言葉で、實は發見するのです。相手とするもの、内容から、人生的意義、値うちといふものを見出すのです。

しかるに、自己の要求する最後のものは、畢竟生命そのもの、それによつて自己が人格として十分な生活を充たし得べき根本の力なのでありますから、人生的意義を發見するとは、その相手の中から、根本の力たる生命を見出すといふことの外ではありません。而して自己が現在かく在ることのできるわけは、やはり自己の中にある生命のはたらきによるのであつて、つまり生命とは自己の本体、即

ち眞の自己を指するものに外ならないのですから、相手とするものに生命を見出すとは、他の中に眞の自己を見出すことであるといひかへることができませう。自己の本体がその中にあるとすれば、他物はもはや他物ではない、やはり自己であり、自己の一表現、一分身であると言はなくてはなりません。従つてこゝに自己と他物との合同が行はれるわけで、即ち自他の融合統一が出来るわけです。ついでに申しますと、徹底した、眞正の批評の職能は、自他の統一を持ち來すにあるといふことになります。

自他の統一は自他交渉の究極であつて、それはひとり批評によつてのみ行はれるわけではありませんが、批評もまた理智の側から、智力のはたらきによつて、その目的を遂げるのです。理智の側に於ても、批評の段階に至つて始まるのでなく、物事を見て取つて、事實を事實として認定するのが、既に他を自己に統一する第一段であり、次にその意味を理解する解釋説明の出來たといふのが、統一の第二



段であり、批評に於ても、その初步から完了に至つて、始めて統一が出来あがるわけです。

この立場からいへば、理智の働きは、分析の方法によつて、最後の綜合、即ち統一に達するはたらきであるともいへるでせう。而て批評は、その統一の仕事を完了する段階であるともいへるでせう。

#### 一五、批評は智的創造の完成

自他の統一は、自他の中に内含されてゐる生命のはたらきによるものであつて、而てその生命は自他に内含されると同時に、自他を超越するものでなくてはなりません。この事は始の方で申しましたが、自他を超越せずに、飽くまで自他の差別の中に閉ぢこめられてゐるものなら、自他を統一することができない筈ですから、自他の統一をするといふ以上、自他を超越して、その兩方を抱擁し得るものでなくてはなりません。而もかくの如く自他に内含されつゝ、自他を超越し、且

つ自他を合せて、一つに抱擁するはたらきは、現實の自他何れにもそのまゝ見られないのでありますから、この働きは一つの可能態、即ち「せひさうあるべく、して、且つさうあり得るはたらき」或は力です。この意味から言つて、自他統一のはたらきは、取りも直さず、理想そのものでなければなりません。

前に、「理想とは生命である」と申しましたが、批評の動機から見て、やはり同じ結論に達したわけです。それで批評は理想を作り出す、又は発見する（その最高段階に於て）理智のはたらき（最後の段階）であると言ひ換へられるでせう。而てこのはたらきは、自他の生命と生命との間に行はれるのであるから、つまり生命自体が自体を分析して、更に綜合するはたらきであるといへることになるでせう。分析綜合を一つにいひ表はせば、すなはち組織といふことであり、組織は構成であり、構成は形式に於ての創造（私どもの世界に於ける創造とは、結局常にこの意味に於てゝす）です。この意味で、又批評は理智的創造作用の最後の段階とい



ふことになります。それゆゑに、批評は人生最後の目的に拘はるものであり、又批評を以て藝術の一つであるとするに、最も深い理由があるとしなくてはなりません。

他の方面からいふと、創造は即ち理想の實現に外ならぬのであつて、生命とよばれる無限の可能態が現實になりゆく過程であり、而て無限の可能態は制限されるといふことのない働きであるから、これはとりも直さず自由そのものです。そこで批評は、自由を自他綜合の上に實現する理智のはたらきとすることができませう。而て自由とは理想の世界のものであり、理想の實現か自由の獲得に外ならぬと前にも申しましたことを、批評の性能から再び結論されることになります。真正の批評の徹底するところには、かくの如き職能が現はれるのでありますから、評批は慎重にすべきもの、嚴肅にすべきものといふよりも、一步を進めて、批評は神聖なもの、極めて敬處な態度で取扱ふべきものといはなければなりません。

ん。輕卒粗妄な批評は、人生を冒瀆し、自他を破壊するものといはなければなりません。

#### 一六、「批評的態度ではいけない」といふこと

ところでここに一言しておくべきことは、「批評的に人の言葉をきき、物事を見てはならない、すなほに、信じてかゝらなければいけない」といふ忠告訓戒を受けることが間々あることです。これは一体どんな意味であるのでせうか。批評が、前に言つたやうに重大なもので、人生の意義を發揮するに缺くべからざる、理智の高級な働きであるならば、批評的に言をきき、物を見ることの排斥されるのは何故でせうか。このことを考察する、即ち問題として解釋する順序として、この言葉の意味の分析から始めませう。

前の言葉によると、「批評的である」とは、「すなほでない」と「信じない」と「同意義になつて居ります。そのまゝ是認しないことに於て、どちらも同じこと



であるが、「すなはでないこと」とは反抗的のことで、破壊的のことで、意志の一つの態度です。「信じない」とは疑ふこと、否定的のことで、理智の一つの態度です。すると批評的とは更に破壊的の意志を持つ、否定的に理智を働かせるといふのと同意義といふことになるでせう。嚴密な言ひ方ではありませんが、まづ大体にしておきます。そこで問題は更に一步を進めて、次の二問題に變ります。第一は批評的といふことを、破壊的、懷疑的と同意義とすることは正しいかどうかといふ問題、第二は破壊的、懷疑的といふことは、果して排斥しなくてはならないのであるか。排斥するとすれば、いつでも必ずか、或る場合に於てかといふ問題、即ちこれです。批評的といふ言葉を、すでにのべたやうに、物事の値うちをきめる働きの意味に用ゐるならば、破壊的、及び懷疑的といふ言葉と同意語とするのは正しくありません。これだけでは獨斷の形になりますが、間違ひのない結論と考へられるので、文章を簡單にするために、考へる途筋をば省略します。

次に破壊的、及び懷疑的といふことは、人生の目的から見れば、それに背くことですから、排斥しなくてはなりません。しかし方法の上から見れば、破壊は必然に生活に伴つて來るものです。私共の生活は常に建設を目的とするものではないが、その建設には何等かの破壊を伴はないことがありません。手近かな衣食住のやり方を見れば、私どもがいかに慘刻な破壊を自然物の上に加へてゐるかがわかるでせう。又疑ひは知識の本とも言はれてゐるやうに、理論上では、若し物を始めからそのまゝ受容れるだけで、考へたりしらべたりすることを全くしないとする、すべてがそのまゝ何時までも残るだけで、知識の發展といふことがありません。知識の發展はごうでもよろしいとしても、生活のためには、考へて知識を構成するやうに、私どもの精神ができてゐるのですから、しかたがありません。疑ふところに問題が起るともいふことができますから、疑ひは理智の職分とも本性とも見ることができません。従つて破壊は必ずしも排斥すべきでなく、また排斥



することの不可能なものです。

それならなぜ「批評的ではないけない」といふ、理論上成立たない、又は無意義な言葉が屢々用ゐられるか、今一つ理論を離れて考へて見なくてはなりません。

### 一七、いけない場合のいろいろ

「批評的ではないけない」といふ言葉の用ゐられる場合を考へると、その有り得る場合はいくつか與へられます。まづ第一に、話す人が批評といふことを恐れるがために、智力の徹底した働きを豫め抑止してかゝる場合もあるでせう。これは不當な要求の發表であるから、論外に置いてよろしいと思ひます。第二に、發表する人や事柄の權威を認め、理論なしに受容れよといふことの要求である場合もあるでせう。これはしかし要求する方に、果してそれだけの權威があるかどうか、要求される方が果してその權威を認めるかどうかによつて、この意味の批評抑止が、正當乃至有効であることもあり、ないこともあります。權威の實質のない場合、

それを認め得ない場合に、いかほどこの要求を提出しても無効であり、また正當でもなくなきます。若し果して權威があるものならば、それは必ず十分な理論的根柢を含んでゐるはずであると同時に、また相手は理論の證明なしに是認しますから、こんな要求を持出す必要はありません。

第三に、批評的態度をとるべきでない場合に、批評的態度をとることを止めさせる場合です。それは又甲、理智以外の精神活動、即ち感情や意志を主とする生活の中に理智活動を主として持ちこむといふ廣い場合、乙、狭く理智のはたらしでも、まだ批評の階段にまで進んでゐないのに、その途中をとび超えて、輕卒な批評を下す場合、この二つの場合の誤りを訂正しようとする意志の表出と、わけで見ることができるとせう。

甲の場合も、更に善い場合と、わるい場合とになります。たとへば友人同志集まつて愉快に遊んでゐるところへ、第三者的の冷靜な理智の判断を持ちこむやう



なのは、加減のよい風呂に水をさすやうなもので、興をさます仕業に相違ありませんから、このやうな意味の「批評的態度」は止めなければなりません。しかしその遊びや會話があまりに下劣又は有害なものである場合には、その値うちを判断する理智を働かせて、過失を訂正する必要がありますから、この場合の批評的態度は正當であつて、是非必要なことです。

このいけない方の批評的態度をとる者は、世間になかく見られるやうです。人が非常にまじめなことを話したり、又は行つたりしてゐて、而してその内容は相當値うちを持つてゐるものであるのに、その内容の理解はそつちのけにして、その言葉ぐせを笑つたり、身振態度を嘲つたりして、打ちこわしをやるなどは、つまり一つの不正當な批評をその行爲の中に含んでゐるのであつて、これによつて、評者がまじめに物を見ることのできない性格の人であることを廣告すると同時に、相手の心持ちを傷けて、憤りを感じさせ、二重に評者自身の値うちを下げ、

又事柄や人間關係の打ちこわしをやるのですから、最も憎むべく、賤むべき輕佻浮薄の有害な態度として、極力排斥しなくてはなりません。

#### 一八、結局は「十分な批評的能力を常に働かせよ」

意志活動を主とする場合とは、つまり實行の場合ですが、これは短い時間をつていへば、總てを忘れて、専心一意その行動に熱中すべきであつて、その態度にゆるみさへなければ、批評的態度などになる隙間はありません。批評的態度にななるのは、意志が衰へて、冷靜な理智のはたらく餘裕のできた場合で、これでは實行に熱注ができませんから、そんな時に「批評的態度がいけない」と言はれるのは當然です。しかしこれは批評的態度そのものよりも、もつと廣い深い精神の状態から來てゐるので、「批評的態度」と言つただけでは實は足らないのです。平たくいへば「仕事に熱注せよ」といふ注意と聽くべきです。意志の緊張状態はしかしいつまでも續くものではないのであつて、實行的態度にも従つて一張一弛



があり、その意志の低い波になつたところには、理智の高い波が現はれて、反省や研究や、計畫が行はれます。その時には十分な批評的精神が働いて、意志活動を正しい方向に高めなくてはなりません。

乙としてあげた種類のいけないことは、前に、批評と他の智的段階との關係を見たところで申しましたから、こゝでは略します。殊に人の言ふことをきき、人のすることを見る場合に、始めからそれに對する批評をこしらへて置いてかかることのいけないわけ、さうしてそれを指して「批評的態度で物に對してはいけない」と言はれることのある、正常な場合を記憶しなければなりません。

終りに注意すべきことは、かうしてしらべて見ると、「批評的態度ではない」といふ言葉が、意義ある用ゐ方として是認される場合は、むしろ正しい批評的態度でない場合、又は十分な批評的能力を缺いた場合の注意であるといふことです。しかし事に當つて正しくその意義を判断する、廣い意味での批評的能力が働い

てゐるなら、前にあげたやうな、まちがつた態度に出る筈がないのですから、「批評的ではないけない」といふ言葉の眞義を推しつめて尋ねるならば、「眞正の批評的態度をとれ、」若くは「十分な批評的能力を常に働かせよ」といふことだと解釋して宜しいでせう。

### 一九、主張と勧誘命令

私どもが事實の報道と、之に對する自分の意見、即ち自分の解釋と批評を混同してならないことは、既に前にのべました。なほつけ加へておくべきことは、主張と勧誘と命令とを混同しないやうに、明確な理解を持たなくてはならないといふことです。

主張とは自分の意見を他人に申立てることですが、それは固より正しい判断の上になつた、間違つたところのない、又疑わしいところのない意見でなければなりません。これはわかりきつたことのやうですけれども、世間では、意見の内容



がよい加減のものであるのに、自分の感情とか、地位とか、体面とか、利益とかの上から、ただむやみに強く主張するといふやうな場合を見るのがよくあるのです。何故にそんな主張をするかと、その理由を問ひつめられると、もはや説明のできないやうなことを主張して、理由を説明する代りに、權柄づくで怒りとはしたり、さもなければ、一時の思ひ付きごまかしたりするのは、甚だたちのわるい、排斥すべきことゝ心得なくてはなりません。

主張は結局他人にその意見通りの實行を豫期することになるのですが、しかしそれは間接にであつて、直接には、自分の意見を他人に承認させる、自分を他人の前に現はして見せる、又は自分を他人に認めさせるといふ性質の仕事です。つまり他人の判断に訴へる仕事です。勧誘となると、一步進んで、他人の判断に訴へて、自分に同意させる、自分を他人の思想の中に確立させるといふだけに止まらず、他人を動かさうとする意志の働きになります。主張は自分を主とするに止

まる傾きが強いのですが、勧誘は之に比して、他人が直接の目的になると言つてもいいのです。少くも他人の判断のみでなく、その感情に訴へて、やがて自分の要求と合致する意志活動を起さなくてはなりません。

他人を動かさうとするのであるから、十分正しい根據の上に立つた、自分の確信に本づかなくてはならない上に、之に對して十分の熱情をもつてゐなくてはなりません。自分が眞實之を信じ、之れに熱情をもつものでなくては、到底他人の感情を動かすことができません。勿論世間にはさうでない勧誘は澤山にあります。商品の廣告などはその著しい例であつて、品質や效能を實際以上は大きく、むしろ十倍も二十倍も大きく吹聴して、是非とも買はなければならぬやうに勧めます。けれども人はこの廣告に對して、どんな考へを持つてゐるかを見たならば、虚偽の内容を持つた、勧誘の値うちがわかるでせう。ですから近頃は、たとひ商品でも、信用を重んずるものは、決して強いて勧誘などはせず、まして誇大な効



能などはのべ立てず、ただ卒直にその品質を説明して、讀む人の自由な判断に訴へるに止めます。又買ふ人も、事實を記さない、効能書きだけのものには眼を止めず、正直に性質だけをのべたやうなものに注意するやうになつて來ました。知識のある相手にとつて、事實ありのまゝがいかにも有力なものであるかゝるでも説明されます。自分が十分な確信と熱情とを持たず、又自由な判断に訴へず、ただ人の感情のみを動かさうとする勧誘は、少くも知識のある人にとつて、効能がないのみでなく、むしろ反對に、いやがらせ、輕蔑させる結果になるといふことを、記憶しなくてはなりません。

勧誘は人を動かすにしても、批評を基礎にした感情に訴へて、その人自身に意志決定をする自由を残してゐますが、命令となると、その自由がありません。直接に人の意志に訴へて、いや應なしに、行動を起させます。意志はこちらに在つて、命令をうける人は、その通り實行するだけです。だから殆ど機械的です。従つて

命令にはいや應なしに行動を起させるだけの、十分な要件をそなへてゐなくてはなりません。而て十分な要件のそなはるためには、その形式上支配被支配の關係が確立してゐると共に、その範圍に限られることであり、而て命令の内容に、確信と熱情とに基いた、斷乎たる決意が含まれ、その表現が極めて明瞭正確で、黒か白か、右か左か、一厘の間違ひもないものでなくてはなりません。機械的といふものゝ、やはり人と人との精神的關係ですから、十分な理由の具はらない、ただ形式上の權柄づくで、壓迫して動かさうとするやうな命令は、たとひ實行されても、愉快な、満足な結果をのこさないものです。又表現が曖昧で、疑ひを容れたり、説明を要求したくなつたりするやうなことでは、すぐに間違なく實行させることがむづかしいのです。どうしても背くことのできない、また間違ひやうのない命令、つまり正しい命令は、こちらにそれだけの精神的內容、即ち十分な理由と、熱情と決意と、及び適切明確な表現との要件を具へることが必要です。



## 二〇、生活世界の組織と意見の確立

以上私どものは智力の働きをしらべて、その實生活上に於ける發動は問題を解くといふことにあること、而て問題を解くに就ては、まづ精確に事實を認め、次には明晰にその意義を解釋し、次には正當にその値うちを批評して、一箇の意見を確立し、やがては、次第に慾求の熱情が加はり、實現の意志の働きが加つて、主張となり、勧誘となり、命令となり、かくて具体的の實行に移る趣きをあとづけました。これは外界を自己に統一しようとする一面を眺めたのでありますが、その中でも、批評の段階までは、外界を自分の中に取り入れる形であり、主張から後は、自分を外界に持ち出す形になつてゐます。しかし内側から眺めて見ると、外界をとり入れるのは自己を外界に露出することであり、自己を外界に持ち出すのは、外界を自己に取りこむ結果になるといふ、反對の働きをして居ると見られるのですから、要するに外界を取り入れると、自分を持ち出すと、兩面の形を一

しよにして、智力の働きが進むものと解すべきでせう。

この智力の働きは、ただに外界に對してのみ、このやうな働きをするのではないのであつて、同じやうな心の働きが自己の内界にも行はれます。むしろ外に向つて働き出す前に、既に自己の心の内に働いてゐるのです。自己の心の動きを認め、その意義を知り、その値うちを定めて、一箇の意見の成立つとき、その最高最大な全体的根本的なものを指して理想と申します。この理想は要求ですから、それが確立するとは、それが實現せらねばならないものであり、且つその實現の可能であることが承認されることの外ではありません。即ちその時には既に自分が誘はれ、動かされて、實行の方向をとり、その確立と承認との度が進むに従つて、固い信念となり、せひともさう行動しなければならぬ、それをせずにはのがれられない壓迫強制を心に感じさせて、そこでその通り行動することになります。即ち自分に對する命令として自分に臨んで來ます。



このやうに動きつつある自分が、その各段に於て外界に發動するとき、直ちに主張勸誘命令となるのであつて、この内面の充實なしに外界にのみ、その發動のあることはありません。尤も自分には確實でもないことを主張したり、自分はしたくもないことを他人に勧めたり、自分にはせひともない意氣ごみのない命令を發したりすることも、實際にはありませうが、その場合には、人が受取りません。もし自由な立場を與へるならば、必ず空虚な言葉として排斥するでせう。(但し以上に用ゐた勸誘とか、命令とかいふ言葉は、普通に用ゐてゐるやうな、狭い形式的の意味でなく、廣い内容的の意味であることは、大ていおわかりのことゝ思ひます。)

このやうにして、自己の内面の統一と、外界の統一と、また内外兩界の統一とによつて、自己の内容たる完全世界を組織する努力を続けつゝ、生活といふ働きが進んで行くのですが、その智的の働きの絶頂は批評であり、觀察や研究はその基礎段階、主張や勸誘はその應用段階ともいふことが出来るでせう。それで實際生

活に即しての「知る」働きの中心は、考へることであり考へることの目標は、生活上の意見を確立するにあるといふことに歸着いたします。従つて又實生活上に於て、問題を解くとは、意見を確立することであり、その問題の範圍に於ける經驗の統一組織、即ち一つの体系的知識を成立たせることを意味します。

## 二一、意見の確立と判断のはたらき

意見が確立すれば、その問題の範圍内に於て、經驗の統一が出来たのですが、その意見の内容以外に對しては、それ自身が判然と區別されたこと、即ち分割をしたことになります。而て又統一いふと、既に分析されたものゝ綜合を意味しますから、智力の働き方を總て一緒にして、前と違つた言葉にまとめますと、私どもの智力は、内外兩界にわたる經驗に、分析と綜合との二つの方法を加へて、小から大に、淺から深に、粗から精に、次第々々に組織を造り、遂に自己人格の内容の一面たる知識の宇宙、或は智的生活の世界を組立てるといふことになりませう。



前にも言つたやうに、意見の確立は批評によるのであり、批評の本資は判断でした。而て判断の簡単な形は「これは花だ」「あれは鳥でない」とふふやうなことで、分析と総合との、兩様の働きが同時に現はれてゐます。而て又この分析と総合とを同時にするところの判断は、あらゆる智の働きの段階にゆきわたつて、その基本となつてゐることが、少し考へて見ればわかるでせう。

「寒い」と思つたのは、「寒い」と判断したのです。「いやだ」と思つたのは、「いやだ」と判断したのです。「これは昨日習つたことだ」「富士山は扇を倒まにした形に似てゐる」「人の知識が発達したら、やがて火星と通信を交換することができても知れない」「明日は雨か雪かだ」「あの人の心持ちは曲つてゐない。しかしそのした事はまちがつてゐる。」「自分はかうすべきだ」「あの人を助けなくてはならない」など、皆さまざまの形の判断です。で、問題を解くといふことも、この判断の働きを複雑に積み重ね、大きく廣げる仕事の外にはないとは言れるでせう。それで

智力の性能を明にするために、判断といふ働きに就いて、少しづらべて見る必要があります。

判断とは、平たくいへば、黒か白かをわけること、或はきめること、一つの題目にまとめていへば「これだ」ときめることです。

「これだ」ときめるときには、その一つを外のものから區別して、「あれでない」とする意味、更に言はゞ、その外のものではないときめる意味が、反面に伴つてゐます。即ち「白だ」といへば、同時に「白でないものではない」の意味が反面に伴つてゐます。従つて私どもは、一つのを、「白だ」と判断しながら、同時に「黒だ」と判断したり、一つのことを「善い」と判断しながら、同時に同じ意味で、それを「悪い」と判断したりすることができません。従つて又「白いものでもない」「白いものでないものでもない」その間の中ぶらりのものだといふやうな判断もゆるせません。



具體的の物、事柄には、どちらにも言へるもの、白とも白でないものとも、どちらとも言へないといふことが澤山あります。また或る方面から見れば白であるが、或る方面から見れば黒だといへるものが澤山あります。殊に人物などには、そんなのがむしろ普通でせう。併しそれは無数の要素の綜合体であるところの、具體的な物の性質なのであつて、私どもの考へる働き方を、それと混同してはなりません。一つの問題に對する判断では、即ち私どもの知識の本質に於ては、そんなとんちんかんや曖昧はゆるせないのです。白と見える同じ方面から、同時にそれを黒と見ることが出来ないのです。どこまでも「白か」「白でないのか」のどちらか一つに、つまり「これだ」ときめないを承知ができないのです。もしこの「これだ」とはつきりきめる働きがなかつたら、物を認めるといふことも、知るといふことも、何もできません。

### 二二、判断と眞理性

次に、この私どもの判断の働きを振り返つて見て氣のつくことは、「これだ」ときめるとすると、それは「なぜか」といふ問ひに對して、完全に答へられるだけの理由が具はらないと、よく／＼の低能者でない以上は、私どもが満足しないといふことです。或る特殊な関係や場合で、理智を究めることをさしひかへることはあります。理智の働きの自由が許されてゐる限り、十分な理由の具はることを求めます。まだ教育を受けない子供でも、すぐなぜかと理由を質して、納得のゆくまではやめません。考へるといふ働きの發展は、つまりこの理由を求める、理智の本性から起ると言つても、差支へがないでせう。

十分な理由の具はらない判断は、完成しない判断、實質のない判断、つまり判断として許されない判断です。ですからいかに判断の形がはつきりしてゐても、その理由が明白でないか、又は表面に理由が現はれなくとも、十分な根據があるのだといふ信用のある場合でないかであれば、何やら不安で、その判断を承認する



氣持ちになれません。判断は元來十分な理由の具つたのちに成立すべきものであつて、その理由から判断に結着する手続きの、表面に現はれない、つまり證明されてゐない場合もあるけれども、とにかく正當な判断は、この證明の完全にできてゐるものであるもの、少くも完全にできるべきものであることを要します。換言すれば、正しい判断は眞理性を持つてゐることを要するのです。

眞理とはその問題に關して、何時何處でも、何人にも承認されなければならぬ知識で、又どうあてはめても、除外例なしにさうあるべきもの、その通りどこまでも實現されるべきものですが、それはどんな方面からどれだけ追求しても、その理由の十分に示され得ること、その證明が完全になされることを意味します。そんな眞理といふものが果してこの世にあるかと言はれるかも知れませんが、人類の智力は少くもそれを豫想して居ります。それを豫想するからこそ、正しい知識を要求もし、そのための努力もするのであつて、もし全然不可能な、あるべ

からざるものならば、要求の起るはずもなし、その要求を達するために努力するはずもありません。人類の智力は、そんな無意義な、不經濟な浪費を敢てするやうに造られて居るとは、信じ得られないことです。

私どもが何等かの意見を提出し、主張をする場合の心持を、各自に反省して見ればわかることでせう。根據もなく、理由もなく、ただ偶然ふと浮んだ思ひつきだと自覺するやうなことをば、ちよつと言つて見るだけならとにかく、意見として主張して、他人の承認を求めらうなことはなし得ないものです。世間にはどんなことであらうと、一端口から出した以上は、他人に認めさせなければ止まないといふ人間もありませんが、それは智的低能者か、さもなければ權力意識に囚はれて、病的になつた我がまゝ者で、正常の人間ではありません。

### 二三、智的良心——智と徳の一致

私どもの生活の智的側面は、要するところ眞理の追求です、發見です、實現で



す、創造です。生活をして生活そのものたらしめること、かくてやがて生活の最高の値うちを充實し、生命的自由の完全な發揮を成就することです。このはたらしきは實に止むに止まれぬ衷心的要求として、生活と共に、私どもの精神の奥底から突き上げて來る不思議な力です。あらゆる生活の場合に、この要求を徹底させずには許して置けない心の響きを、智的良心と名けてよろしいでせう。

私どもが若し自分の生活を大切に思ふなら、自分の人格を大切に思ふなら、即ち自分自身を大切に思ふなら——生きてゐる以上、自分自身を大切に思はないといふことがある筈はありませんが——斷じてこの智的良心の命令に背いてはなりません。智的良心に背くのは、眞理の追求をよい加減にするのは、とりもなほさず、生活の骨髄をこわすことになるからです。而て全体はその骨髄に支へられて、始めて全体なのですから、その一骨髄をこわすのは、直ちに生活の全体をこわすことになるからです。即ち自分の人格、自分そのものをこわすことになるからで

す。

私どもが物事を観る、理解する、批評する、報道し、説明し、議論するといふ態度の活動をするときには、できるだけ智的良心の燈火を明るくし、その切先きを鋭くして、どこまでもその透徹を期さなくてはなりません。智的活動の場合には、私どもの情熱と意力とは、この智的良心の明るさと、鋭さになつて現はれるのです。冷靜と平寧との形、玲瓏透徹の姿に於て、眞直に、公正に、秩序よく進んでゆく情熱と意力との働きが、智的良心となつて現はれると言つてもいいでせう。良心とは道徳上の言葉であるのですが、又偽りを許さないといふのは、知識學問思考に關する道徳に相違ないのですが、實はこれは眞實を求めて止まない、値うちの充實を求めて止まない、生活の全体的要求としての理想から起つて來る中心の働きであつて、判斷と感情とを一つにした、最高の威力です。道徳上の良心も、知識上の良心も、共に生活的良心ともいふべき、全体的要求の違つた現はれ



と見るべきです。従つて智的良心の鈍いもの、即ち虚偽曖昧の知識で満足できるものは、生活全体に對する良心の鈍いもの、眞實の生活を求めないものと斷定すべきであり、而て又同時に、この人の道徳的良心も亦鈍いもの、善を求めず、惡に甘んずる人であると斷定して差支ありません。この根本に於ては、それゆゑ智と徳とが一致することになります。

#### 二四、似て非なるもの

世の中には「似て非なるもの」といふのが澤山にあります。知識を求めるもの、眞理を求めるものにもそれがあります。

親がいま少し教育をして置いてくれたら、高い學校へ入れてくれたら、もつと物のわかる人間になれたらう、何かできる人間になつて居たらうなごいふ人に、屢々出逢ふことがあるものです。この人はいかにも知識に對して熱心なやうですが、實は「似て非なるもの」と言はなければなりません。親が教育してくれなくて

も、自分で修養すればいゝのです。少くも教育が大事だと氣が付いた以上、自分で自分を教育すべきです。しようと思へば、いかやうにも出来るのが修養であることは、前に十分述べました。親のみでない、總て罪を他人や境遇に負はせるのは、自分の責任を逃れるもの、自分の意志を放棄したものですから、たとへ親が教育してくれても、境遇がよくても、ごうせろくなものになることはできません。その上現在眞に知識の缺乏を感じるなら、一生懸命その獲得に努める筈であり、一生懸命努めてゐる現在なら、過ぎ去つたことを無意味につぶやく暇のあるはずがありません。無意味に過去をつぶやくのは、自分の現在に不まじめな、怠惰な閑人のしるしであつて、ただ輕蔑すべく、排斥すべき種類の態度に屬します。他人が深切に教へてくれないと言つて、怨みがましく訴へる人もあります。この人も知識を求めるに熱心らしくて、實は「似て非なるもの」です。「人が教へてくれない」といふのは、他人の態度を批評してゐるのであつて、自分が求めてゐる







る生活とし、自己が完全に統治する自由の世界を内面に造り出すのが理智の職能であり、従つて一つの石ころや木の片でも、石ころや木片そのまゝでなく、一つの問題として取扱ふのが、智力の性質なのですから、さうしないことが、智能のある者にとつて、不愉快不満足なのは當然なことでせう。従つて又そこに不愉快不満足を感じない人を、智的低能として輕蔑するのも當然なこととせう。

智能の活動を精確に鋭敏にするのは、自分の生活に對して、嚴肅で、眞摯なためであり、従つて嚴肅で眞摯な生活があれば、それが背景となつて、一つの石ころにでも、一つの木片にでも、意義を伴つて來ます。何も特別な努力をして、わざとらしい芝居をしないでも、自然に流れ出して來ます。知識の材料にするのではない、その取扱ひ方、その態度によるのです。

「今日は天氣が好い」「昨日は雨が降つた」といふやうなつまらない話でも、内面に生活の背景を持つてゐれば、その言葉の響きが違ひます。その響きが人を納得

させるのです。私どもは知識の分量を殖やすよりも、經驗の數を積むよりも、この内面の態度方法に力を用ゐなくてはなりません。自分の生活としては、石ころを無意味に澤山かき集めるよりも、一つの石ころと、わが生活との關係を深めるべきです。それを言ひかへると、つまりわが内面の生活の世界を廣めるといふことになります。自分の生活に對して、熱心で忠實な態度が、智の働きに現はれた場合には、せひともさうならなくてはなりません。

前にも言つたやうに、熱心忠實な態度が智力の上に現はれたときに、必ず事物の真相をたしかめ、關係の眞義、活動の眞理をつかますには置けない、即ち智的良心と呼ぶことのできる精神が働き出して、小さな主觀の、わがまゝな出來心を制御し、大きな客觀に信頼する努力を呼び出します。かうならなくては、いつまでも生活の精神的根柢ができずに、浮草のやうな生涯を送らなくてはならず、いつまでも自分の住むべき精神の世界を持たないで、三界に家のない、浮浪人の生



活をして一生を終らなくてはなりません。

## 二六、何か一つの研究題目を持つこと

智的修養のためにも、生活の利益のためにも、亦一種の娯樂のためにも、何等か一つの研究題目を持つといふことは、あらゆる人にとつて必要なことあらうと思ひます。それはもちろん必要からか、興味からかはひるのであるが、この二つは、意識を以て生きてゐるかぎり、何ひともち合はせてゐるはずですから、研究の出発点はいつでもあるわけです。次に問題と材料とですが、これも生活してゐる限り、何ひとの身のまわりにも無數にあります。

たとへばご飯を最も簡便に、最も安價に、最もおいしく炊くには、如何なる要件が必要かといふ問題は、臺所をつかさどる何ひとにも必要で、興味ある研究題目でなくてはなりません。その題目の中にも、また無數の小題目がふくまれます。米の質、新舊の年代、乾濕の度、搗き加減、時候及び氣象、火熱の材料の種類、

火焔の大小、その變化、煮る時間、むらし方、煮る器具、蓋の具合、移し方等と算へて來ると、關係事項は實に澤山になります。而てそれを好い加減な分量でなく、一一數量的に確定してゆかうとすると、相當科學的研究ができることになるでせう。もしそれを十分に研究するならば、飯の煮方に關する、立派な學者として立つこともできます。又その研究に基いて、有益な發明工夫をすれば、經濟上意外の副産物の收獲をすることもあるでせう。これは主として實益に關する題目の一例ですが、一旦研究にかゝれば、その間に大きな興味が湧いてくるものであることは、多少の經驗から推測されることです。

種々の材料と料理法、配合法、食べ方などは趣味と實益と兩方に關係した題目といへるでせうし、一つの部屋の目的と、構造と、種々の部分の色彩關係と、家具の形や配置などは、趣味の方に主として屬しながら、多大の實益を含む研究題目になります。その外ただ一つの手藝に深入りして、いろ／＼の工夫をして見るこ



とでも、日々讀んでゐる新聞の中から研究題目をとることでも、日々の生活にあらはれる精神状態を材料とする心理研究でも、庭園、蔬菜、家畜に關する研究でも、趣味と實益とを兼ねた題目が、人の擇ぶにまかせられてあります。殊に家族の人々を中心とした心理、生理、病理、その中でも、子どもに關する研究は、主婦たる人にとつて、せひとも一通りしてゐなければならぬことですから、その中から、特に深くしてみようといふ題目も發見されるでせう。

日常生活に直接關係のない、特殊の研究題目をとることは、精神に一つの別世界或は餘裕をつくる上に、大そう有効であらうと思はれます。たとへば社會學であるとか、哲學であるとか、或は「源氏物語」の研究とか、清少納言の傳記であるとか、言葉の研究とか、衣服の歴史であるとか、一地方の傳説風俗であるとか、澤山の暇と勞力と金錢とを費さずに深入りしてみる工夫は、どんなにでもつくつとでせう。

私どもの智能は、實際生活のあらゆる機會に於て、隱に顯に活動し、研磨されてゐます。従つてその生産物たる知識も、亦絶えず發達し、精鍊されてゐるわけですが、併し又智能知識が、精神生活の特殊な一方面である以上、その一方面だけの、獨立した、且つ組織的系統的の活動を自由にしてみるといふことは、發達を十分にし、精神生活を精確にし、殊にまた一箇の精神的別世界を新に開拓する喜びを味ふ上に、必要であらうと思ひます。社會に學者といふ専門家の必要であるやうに、私どもの生活内にも、學術的部分があつていゝわけです。總ての人にこの學術的生活のあるといふことが、専門學者の立脚地、人類文化の發達の基礎となるのでありますから、この意味に於て、私どもが何等か一箇の研究生活をするといふことは、啻に個人的意義の深いのみならず、十分な人類的の意義があると言ふべきです。



## 第三篇 「善」を求むる生活

### 一、行爲と善の理想

善の理想に對する要求のはたらきは内面に於ては、意志として現はれ、外面に於ては實行として現はれます。或は反對の方面から申しますと、私どもの生活の一側面、一方式である實行が目的とする最後の値うちは善の理想であつてその追求の内面的精神活動が意志と呼ばれるといふことになります。

實行とはどんなことか。それは最も常識的に明瞭なことのやうですが、一應はやはりその意味を調べて、考へることや味はふことの生活方式と、どう違ふかを明かにし、實行の効果を十分にする要件を見出さなくてはなりません。

廣い意味では私どもの生活全体がそのまま實行に外ならんのですが、しかし普



通には、考へることや味はふことと區別して、それだけ狭い意味に用ゐてゐるやうです。

それならその區別はどこにあるかといふと、外に表はれた行爲、或は眼に見えらる結果を伴つてゐるのと、ないのとに主として關係します。外に表はれた行爲といふと何等かの意味或は部分に、身体的動作が伴つてゐることですが、しかし身体的動作があれば、いつも行爲となり、實行になるとは限りません。その動作には必ず精神或は意識が伴つてゐなければなりません。更に言はゞ十分な人格的意義を持つた、意志から起る動作でなければなりません。つまり一定の目的があり、それを達する手段があり、それに對する注意と努力との現はれとしての動作でなければなりません。かういふ意味をつめて、行爲とは有意的動作であると申します。而て考へをこの行爲に現はすことをさして實行と申します。

この我れ自ら意志し、我れ自らこれを爲すといふ自覺に終始してゐることは私

どもの行爲にとつて大切なことです。これがあれば人格的、即ち人間生活としての行爲となり、これがなければ機械的の行爲即ち無意義の動作として、私どもの生活要素たる資格を失ひます。従つて外面の形式上、いかに立派な動作を経験しても、私どもの生活理想を實現し、私どもの要求を満足させる行爲とはなり得ません。

自ら意志するとは、自ら選擇し決定した目的に對して、自ら働きかけることを意味します。自ら選擇し決定するといふ以上その目的は自己にとつて最上の値うちでなくてはなりません。最上ならぬものを選ぶといふは、擇ぶ意義をなしません。であるから、私どもの行爲は常に生活上の最上の値うち、即ち善の理想を追求し、その實現を結果することの外にあり得ないこととなります。もし有り得るといふなら、それは人格の基礎に立たない場合、即ち人間として生きない場合に限ります。



## 二、人間と自律的生活

善の理想は最上の要求であるから、私どもの意志はこれが實現に向つて働く外に働くことを許されません。許せば人間外に墮落することになります。こゝに於て、理想は唯一にして、而も避けることのできない道を私どもに示し與へ、せひともその道を踐ませずに置かない權威として、私どもに臨んで來ます。

さうすると或は疑問が出るでせう。それならば全然人格の自由といふものが無くなり、のがれられない一種の運命の力に左右されるわけになるのであるから、機械が自力でなく、人間の手で動かされると同様なことになるのではないか。物質が考慮選擇の餘地なしに、物理や化學の法則通り運動變化すると同様なことになるのではないか。人間が理想により、要求によつて生きるといふのは、たゞ空虚な幻影のやうなもので、實は却つて自然物質の例に自分と墮すのではないかと非難されるでせう。

この非難は一應尤もなのであつて、逃げることを許さない力を以て我れに迫る點に於ては、自然の法則も、理想の法則も共に同じやうなところがあります。けれども、自然現象の運動變化は、自覺の有無に關係しません。自分が意識するとしなないとに關係しません。要求とか理想とかにも關係しません。「我れ」として生きるかどうか、人間として生きるか生きないかにも關係しません。ところが理想の與へる道の力は、人間として生きる場合に於てのみ、發揮されて來ます。「我れ」の自覺意識の中から現れて來る力です。もし私どもが自我の眞の値うちを目的とせず、人間として生きることを中心するなら、善の理想などは路傍にころがつてゐる石ころの一つほどの權威もなくなります。つまり理想の與へる道は自我と終始し人間人格と終始する力です。もし運命といふならば、それは我れと關係のない外部の力ではなくて、我れ自らのの中から生み出された運命です。自分の作り出した運命です。この點が自然現象としての生活と、人格精神としての生活と全く



違ふところなのです。

いかなる場合にも例外例をゆるさない力でなくては、理想や法則は意味をなしませんから、一旦それが定立された以上、それは自分にとつて、逃げ路のない束縛となる。けれどもそれは自由が「かくすべきである」と決定し、又は承認したところで始めてその力を生ずるのであるから、そこに畢意自分の要求があり、意志があるのである。こゝに自分と必然との両方の意味が現はれて、働いて居ります。而てかくの如き生活を自律的の生活と申します。人間の自由この自律的生活をするところに實現されるのであつて、これが人間の人間たる特質なのです。

### 三、理法の絶対權威

人間も一面に於ては自然物の一種でありますから、やはり他の自然物同様に、外界の機械的法則に支配されます。がけの端で足をふみ外せば、谷底に落ちないわけにゆきません。火の中に飛びこめば、薪同様に酸化作用が行はれて、全身灰

になつてしまひます。一日食事をしなければ、空腹を感せず居れません。生老病死、總て私どもの意志如何には關係なしに行なはれます。即ちこの點に於て、私どもはのがれ得ない運命の下に、他律的存在となつてゐる外はありません。

しかし私どもは自然及び自然の法則が、是の如きものであることを理解し、承認し、生活目的を達するためには、せひ従ふべき方針であるとして、その下に生活する點に於て、すでに自然のまゝ機械同然でなく、自律的生活の域にはひつて居ります。「是の如きものなり」と認め、「是くあらねばならぬ」と決意して生きることに、私どもは直ちに自然を離れて、人格の列にはひるのです。これは理解なしにたゞ力が及ばないから「あきらめる」のではない。理解によつて自然を「わがもの」とするのです。我れの内容たる組織とするのです、理解によつて「わがもの」とするだけではまだ智的に止つて、消極的であるが、進んで「かくあらねばならぬ」と決意し、わが目的のための手段として、その法則とほりの生活をするることにな



ると、すでに積極的な、自發の意志に變はるのです。自覺ある人格生活の自然から出て自然以上に進む秘訣がこゝにあるのであるから、私どもは出来るだけこの秘訣を善用しなくてはなりません。

一切の物理的、化學的、生物的、自然現象の本質と理法とは、私どもの力を以てどうすることもできません。一毫一糸の違背紊亂を許しません。けれども私どもは、現にこの嚴然たる實在を利用して、私どもの生活の手段として居るのです。機械物質の利用は、その本質と理法との變更を許さず、除外例を許さないところで出来るのであつて、もしその本質と理法とが不定の一點でもあるなら、外界に對する私どもの計畫や方針は立たなくなるわけです。従つて私どもの生活に於ては、全然私どもの勝手な興味や、慾望や、想像を棄て、自然に絶対服従をするときにのみ、最もよくその目的を達することが出来るのです。

自然の理法に絶対服従をしなければならぬといふことを、裏の方からいへば、「私我を棄て、かゝらなければならぬ」といふことになります。「勝手な、偶然的な私情我意の妄動を許さない」といふことになります。この點に於て、自然科学的研究はたゞ實際生活上の便宜利益を持ち來すばかりでない、更に又私どもの人間としての道德的修養の上に、深刻な暗示を與へるものと言はなければなりません。

私どもがとりのけなしに、絶対服従をしなければならないのは、たゞに自然の理法のみではありません。凡そ理法に對しては、すべて絶対服従の態度をとらなくてはならないのです。さもなければ、理法が理法たる權威を持ち、理法の理法たる働きをすることができないのです、であるから、私どもか自分の要求から生み出した、自分の理想の與へる道であつても、一旦「しかすべきである」と確立された以上は、やはりそれに絶対の權威を認めなくてはなりません。自分の考へ方で認められた理法であると言つて、もしそこに一點の都合勝手、私情我意を入れて、



一毫のどりのけをも許したならば、立ちどころに道の權威は失はれ、従つて理想の意義は消え、従つて又人間としての自己の立場が壊れてしまひます。

#### 四、犠牲、献身、奉仕

自己の要求から生れたものではあるが、一旦「かくあるべく、かくなければならぬ」と確立した理想に絶対の權威を認めて、その前に拜跪し、自由な意志で擇んで而も絶対の服従をする。これが善を目的とする私どもの道徳的生活の根本的態度であるのです、

要求であると同時に運命であるところの、「止むに止まれぬ」方に動く私どもは、主人であつて、且つ同時に奴隷であるもので、これが私どもの人格です、人格としての生命の發展の姿です。最上の生の値うちそのものとして生きる、私どもの人たる道なのです。

犠牲といひ献身といひ、奉仕といふ。これ等の尊き行ひである理由は、即ちこ

こにあります。最上の値うちである至善に於て生きることは、私どもが人間として止むに止まれぬ唯一の道であるが故に、その外に生きる——最上の値うちとして生きる、即ち絶対自由の我れとして生きる外に道がないから、それで 我を棄てて、犠牲となるのです。この至善の値うちの前には、犠牲となるのです、この至善の値うちの前には犠牲とならないわけにゆかないと同時に、至善の値うちのための外に、わが身を犠牲にすべきものはありません。献身しなければならぬものはありません。もし外にもあるといふなら、そのうちのごちらかう間違ひであるか或は一つものを二た通りに見たのであるかでなければなりません。

私どもは奴隷であるから、主人たる至善なるもの、前に、道徳的理法の前に奉仕するのは、固より當然すぎるほど當然の話です。奉仕といふと、二心なく、全力を捧げて、たゞ至善の精神のあらはれるやうに、至善の命のまゝに力めることに外ありません。わが全心全身を捧げるといふ以上、一毫も我意のために動くこと



ろがあることをば許されません。

至善なるものゝ前に機械となる姿は、全く自然法に支配される自然物と同じことです。たゞ私どもは自覺して、即ち承認し、覺悟し、決心して機械になるのです。私どもは獨立の資格を以て奉仕するのです。自由の意志を以て献身するのです。歡喜満足の意識を以て奉仕するのです。自然現象と形は同じやうであつて、しかしその心は天と地だけの相違です。

犠牲といひ、献身といひ奉仕といふことを一つ言葉にまとめるなら、それば要するに「私を去つて、至善を奉ずる」といふことです。まづ「我」をすてるといふことです。すると、或る人は「それは自殺ではないか、精神的の自殺ではないか」といふかも知れません。いかにも或る意味に於ては自殺です。けれども普通の罪惡的自殺と違ふところは、私情を以て、我意を以て、わがものならぬ生命の根源を絶つのでなく、至善なるものにわが身を委ね終る結果、自殺の形になるといふこ

とにあります。目的は至善を我に獲るにある。最高の生命に於て生きるにある。生命の泉を掘るにある。而てその結果は、そこで始めて新に人格として生誕するのです。全く反對です。

我れを彼れ——至善に委ね終るが故に、意義に於て我れは我れでなくなる。我れが死んで、至善がその座を占める。而て至善こそ、求めて止まぬわが眞生命であるが故に、現實の我れ、即ち假我の衣をぬきすて、眞我を實現することになる。即ち眞の我れが眞に生きる喜びを獲るのです。この故に自然生物としての我れ、現實の我れ、假りの我れに執着して、その排棄を肯んじない限り、われは人格者として、人間として生きることが絶對に不可能であるとしなくてはなりません。「己れのために生きんとするものはその生命を失ひ、神のために死するものは生命を得」とクライストの言葉にあります。神とは至善であつて、即ち生命の本源だからです。



復活といふ言葉がある。甦生といふことばがある。「大死一番、然るのち蘇生す」といふ言葉がある。皆この假と眞、死と生の更代の形に於て、眞生命が人格的の値うちとして獲得されることを意味するものと解して、さしつかいないでせう。

##### 五、重大な道徳的誤謬

犠牲、献身、奉仕などは、昔から非常な美德と認められて來たのであるが、その眞義の理解されなかつた爲めに、種々の誤りを生じてゐました。

私どもが犠牲となり、献身し、奉仕すべきものは、唯一の至善なる權威に對してであると言つても、至善そのものが形ある一箇体として、宇宙のごとくに一つの場所を占めてゐるのではない。ここにあるとか、あそこにあるとか言つて、手で指し、眼で見るとにはゆかない。我れと物と、一切の存在の中に、内容として、意味として、値うちとして充ち満ちてゐる生命であつて、物の形象ではないと同時に、物の形象を離れて別に在るものではないのであるから、物の外にそれを見

ることができないと同時に、物——表面——だけを見たのでは見えないのです。従つて見るといへば、肉の眼を通して、心の眼で見なければならぬし、指すといへば、肉の手を通して、心の手で指さなければなりません。

この關係にあるところから、見るところが物に囚はれ、表面に止つてしまふ誤りを生じます。而て犠牲になり、献身し、奉仕する形の立場に立つた場合には、他の人のために、他の物のために、大事な自分の生涯を捧げるなどはつまらない、むしろ自分を殺す罪惡である。自分は自分のためにのみ生きるべきであると言ふ。又犠牲、献身、奉仕を受ける形の立場に立つた場合には、自己一人の便宜、快樂、幸福のためにそれをうけて、他人を手段とし、奴隷とするのが當然なこととする。親子、主従、強者と弱者、支配者と被支配者との關係に立つたとき、多くはその目標を誤り、精神を忘れ、非人格的な利己主義、自我主義、わるい意味に於ての個人主義に墮落するのが、従來の社會の道徳でした。



名は何であらうとも、無限の値うちと根本的要求との精神的關係に立たない限り、或る箇体と箇体と、又は団体間にも、犠牲や奉仕の道德は現はれる筈がないのです。機械的關係は即ち力の關係に於てのみ、相互の動きがあるのであつて、而てそれは人格的交渉を破壊する結果に終ります。いかに高い地位にある人でも、權力を持つてゐる人でも、他人に向つて自己の一身のために犠牲となることを要求することはできません。団体の力を以て個人に要求することも同様に誤りです。又それに服従することが自分に都合がよいからとて、自分の自由な意志と、満足の歡喜とからでなく、強いられて犠牲になるのも無意義です。これは共に人格の冒瀆です、破壊です。強者と弱者、団体と個人との間には、この過失が起り易いものであるから、私どもは判断力を働かせ、精神を覺醒して、美名に蔽はれた偽道德に落ちないやうにしなければなりません。

## 六、愛

他のために——實は他の裏にある値うちのために犠牲となる心情を愛と申しまゝす。愛は献身奉仕の動力となるものであつて、この愛なしに献身奉仕はできません。愛から出たものでない犠牲は、機械的に餘儀なくされた結果の犠牲、或は利害の打算の上から出た犠牲であるから、偽りの犠牲、似せの犠牲であつて、却つて犠牲の反對です。

物質的の言葉で愛を言ひ表はせば、生命と生命とが惹き合ふ力であるといふことができませう。箇体に分化された生命が、更にもとの統一にかへらうとするはたらきともいへるでせう。人格關係としては、その本來の意義、即ち値うちとしての生命が充實發展するために、互に要求として働き合ふ作用であるといふことになるでせう。又その一方の立場から言へば、自我の要求或は理想を、他のもの、中に、目的或は相手として發見し、而てそれを得ようとする、又はそれにならうとするはたらきともいへるでせう。



愛の相手となるものは、他のもの、表の面形ではない。その中に含まれる生命であり、理想であるから、即ち眞の自我なのです。自分にとつて最上の値うち、唯一の生活の目的なのであるから、これがために一切を抛つて、それと一つにならうと力めるのは、固より當然であり、むしろ止むべからざる意慾であり、その外に途のない精神の動きです、それゆゑ愛は第一義に生きようとする私どもの人格的要求が、「要求するもの」を向ふに置いてはたらし出したときに、必然的に起つて来る態度でなければなりません。

止むべからざる魂の願ひでない愛は、眞の愛ではありません。第一義的理想と理想との交渉を基本としない愛は、眞の愛ではありません。最も純眞な心情と、最も嚴肅な態度とを以て、相手の最も神聖な人格、最も深奥な生命に注がれない愛は、眞の愛ではありません。

愛は實に第一義から第一義にかけられた橋です。人格の中心と中心とを繋ぐ鎖です。それ故に愛の働きに於て歩むとき、人は始めて第一義的の生活をする事になります。逆に言へば、第一義的の値ひを持たない生活に、愛はありません。私どもの生活は、常に第一義的であることを心がけなくてはならないから、従つて愛に充ちた生活でなくてはならないのです。従つて又一切を捧げる、犠牲、献身、奉仕の生活でなくてはならないのです。

愛は第一義的生活と終始します、それゆゑに第一義的ならざるもの、第一義的を妨げるものに對しては、最も冷酷に見える態度をとることになります。愛の性質は最も純眞淨潔なものです。玲瓏透徹なものです。公明正大なものです。もし不純不明不公なものがまじれば、その程度に於て、愛が害されなくてはなりません。従つて愛の力の強く働くほど、不純不明不公なものに對する憎みも強く働かなくてはなりません。愛の神は同時に憎みの神です。愛は善の寶玉です。一片の曇りでも許してはなりません。道德的良心の光りは、愛に於て最も鋭く閃きます。



### 七、「愛は獨占を欲す」

愛は熱であると同時に光です。愛を完全なものにするためには、不純な態度、暗黒の氣分、私利私情の念を全然去らなくてはなりません。更に簡単に言はゞ、根柢から私情を離れなくてはなりません。愛と「私」とは兩立する立場がないのです。そのいづれか一方が座を占めるとき、他の一方は逃げる外に餘地がないのです。

「愛は獨占を欲す」と言はれることがあります。これは愛が純一でなければならぬものであるところから、それを相手の形に移して考へる場合であるでせう。しかし純一でなくてはならないのは、愛する者の態度であつて、相手にしてゐるものは、始めから向ふにある純一な人格的生命そのものです。その純一な相手にふれるためには、こちらがまづ純一でなくてはなりません。而て純一とは自己が私我と理想とに分裂しないで、唯一の人格的生命そのものの働きのあらはれてゐる状態ですから、理想によつて私我を克服し、醇化して、その根絶を見た後でなく

ては、眞の愛の力は出て來ないわけです。従つて又愛しようとする意志の動きは、單なる感情の昂奮ではない、智と意との非常な一向精進の努力、即ち自己修養の苦闘が、絶えずその内面を裏づけてゐなくてはならないわけです。この場合に於て、「獨占」とは何を意味することになるのでせうか。

愛とは既にのべたやうに、絶對な人格的の値うちを目あてにして、その發揮、或は成長を希ふ感情であり、更にその感情の發動を全くするための考慮と實行とでありますから、その神聖な目あてに向つて私我をすて、一切を捧げることが、即ち自己の純一を得ると同時に、向ふの純一を求める意味を成就する道すじであるとしなくてはなりません。つまり自己といふものが、目あてとしてゐる値うち、理想、人格、眞要求、靈的精神、神聖な本源に入りこみ、懷きとられてしまふとき、始めて愛が徹底するわけであるのです。それゆゑ「獨占」とは常識上の自己が、形体上の相手を完全に私有するとは正反對に、相手の神聖なものに、自分の



自我が獨占されてしまふ意味と解すべきです。即ち愛がこちらの働きとして現はれたときには、愛は總てを興へるもの、總てを捧げるものといふことになります。従つて又愛の働きそのもの、立場でいふときには、愛は最も貪婪なもの、總てを奪ふものでなくてはなりません。私我に對して總てを奪ふところの、最も貪婪な威力を振ふ働きでない限り、愛は純真であり得ません。

一切を捧げて、私我の立場を狭める程度に従つて、愛の働きが自由に現はれて來ます。愛の働きの現はれる程度に従つて、他を愛することができます。而て一切を捧げつくして、私我の立場を全然失つたときに、即ち私我の分裂が完全に理想に於て統一されたときに、愛そのものが直ちに我れの内容となり、愛の力が隙間なく我れに充ちて、そこで純真に、最大に、愛し得る人となれるわけです。即ち絶對の自由が得られるわけです。

#### 八、「愛は酬ひを欲す」

「愛は酬ひを欲す」といふ言葉もあります。愛と酬ひを求める心とは正反對である筈ですが、これは逆説的の強い言ひ表はしで、愛の眞義を明かにしようとした言葉です。押しつめると、前と同様の意味に歸着いたします。

愛は要求から生まれます。生命に對する要求から生まれます。絶對の値うち、即ち最も貴い、最も神聖な人格的生命に對する、限らない魂の思慕から生まれます。要求は充たされなくてはなりません。思慕はこたへられなくてはなりません。この意味に於て、「愛は酬ひを欲す」といふべきでせう。

但し要求するところのものは、値うちです。最勝絶對の人格的生命、その力、その働きです。その要求の充足されたときには、そこにあるものは最勝絶對の人格的生命であつて、私我の影はかくれてしまひます。そこから流れ出す愛は私我の働きではなく、この人格的生命の働きですから、「愛は酬ひを欲す」とは、私我が欲するのではなく、愛そのもの、働き方であるとしなくてはなりません。従つて



現實の自我が報酬を求めることゝは全く違ひます。普通の「我」れの慾望とは何等關係のないことです。この區別を明瞭に理解しなくてはなりません。自我が物を所有しようとする心で、或は經濟上、物を他人に提供すれば、必ずそれに對する代價を受取る意味で、「愛は酬ひを欲す」といふのではないのです。

物を與へて代價を受取るのは、つまり物と物との交換です。物と物とがその位置を換へた以上の何ごとでもありません。それは永久に二つの物です。併し愛に於てはそれと全く違つて、愛は精神の働きであり、而てその精神の働いた結果は、二つの精神が一つに溶けて燃えるのであるから、畢竟愛が求めて得た報酬は、とりもなはず愛自身であるといふわけになります。従つて又「愛は酬ひを求めず」といふ、正反對の意義に歸着いたします。

愛の求めるものは無限の人格的生命であり、而てその要求も亦無限の働きですから、前の結論を引きのばして來ると、「愛は酬ひを求めざる無限の働きである」

といふことになるでせう。この愛の性質は、實によく實際の生活にあらはれて、人生現象の最も尊貴な、最も神聖な部分をなしてゐるではありませんか。

もし又違つた方向に持つて行くなれば、愛は私我に屬する一切の物の献納を求めるものですから、その意味で「愛は酬ひを欲す」とも言ひ得られないことはありません。しかしこれも交換ではありません。愛自身の中にその一切を溶かしこんで、それを生命化するのですから、普通の意味の報酬とは、この場合も全く違ひます。それ等の意味から言つて、愛はただ絶對神聖な生命の働きです。

#### 九、愛と善——惡人なればこそ

善はわれ／＼の行動の目標となるところの、生活の値うち、意志を以て求めるところの最深要求であり、而て最深要求とは、即ち人格の力であり、理想そのものであるところの、絶對的生命の外にはないのであるから、愛とは善を求める態度、或は善を生み出す精神であるといへます。



愛の動くところには必ず「善」があります。愛は「悪」を愛することができません。愛の対象となるものも、愛の動力となるものも、何等かの意味で善であるべきです。愛は善と善との關係的活動であるとも言へるでせう。善のないところに愛の作用は起りません。

事實に於て、悪人を愛するといふことはたしかにあります。悪人を教化する道は、ただ愛の偉大なる力あるのみとも言はれて居ります。或は不具の子ほどかわいゝと同じやうに、悪人の子ほど親の愛が募るといふこともあるでせう。新約聖書にも、放蕩むすこの方を餘計に愛した親の話が、比喻として出て居ります。しかしこれ等は總て「悪」そのものを愛することをば意味して居りません。むしろ善を愛するが故に、悪人をすら愛するのです。悪人といへども、同様に人間です。人間である以上、その精神の根柢に善の種がなくてはなりません。人格の力、理想の働き、無限の値うちを生み出すべき生命の泉がなくてはなりません。愛はそ

れを愛するのです。

生命、理想、人格、これが眞の「人」であり、善であるのです。而て愛の対象は常に人であり、善であるのです。悪のために沮まれて、人が完全に生き終ふせることができない、善が完全に成就することができないときに、その人を暖め、その善に力を與へて、それをして悪の牢獄から脱け出させ、悪の桎梏をとり外づさせる助力をすることが、即ち悪人を愛すると見られる場合です。それ故悪人を愛するといふのは、悪人の悪に加担して、その悪い働きを成就させるとは正反對に、悪人の「人」を、「悪」から救ひ出す努力に外なりません。

この愛の精神を更に強めて言へば、悪人なるが故にこそ、一層深く強く愛せねばなりません。悪人の裏にある「人」は、悪に縛られて、その正當の生長發展をすることができずに、人格が現はれ得ずに、完全に眞の人になる幸福を受けることができずに苦んでゐる、その最深刻な不幸の淵から、救ひ出さなくてはならぬ



い。而てこれは實に大きな努力を要する仕事です。惡の大きなほど、即ち惡人であればあるほど、その人に對する、愛の力が、いよ／＼ますます／＼加へられなくてはなりません。それゆゑ惡人なればこそ愛するといふ言葉は、通俗の理解に於て矛盾のやうであつて、愛の精神からすると、實は決して矛盾ではなくて、極めて正常なことであるのです。

九十九匹の羊をばうちすてておいて、迷つた一匹の羊を終日尋ね暮したといふ譬ひ話、又金を使ひ果して、たま／＼家に歸つた放蕩息子を、父親が喜び迎へて、大へんな御馳走をしたといふ譬ひ話は、愛のこの働きを、最も簡明にのべたものだと思ひます。「善人なほもて往生をとぐ。况や惡人をや。」といふ親鸞上人の言葉は、更に短刀直入的に、同一精神を表現したものともしへるでせう。

善人とは、迷ふことなく眞すぐに我が家に歸る九十九匹の羊です。父の家に居て、正當に勞働してゐる總領息子です。これを愛せぬのではない。愛は平等であ

るが、その加はり方、働き方が違ふのです。愛は生命を救ひ終るまで、無限に働きます。迷へる者、惡人に對しては、その惡の消え終るまで、生命の眞に救はれるまで、止まることはありません。親鸞上人の言葉は、もちろん自力を排斥して、他力本願專修の教旨を説明したものでせうけれども、また愛の本意を明に示した言葉としても、借りて用ゐることができでせう。

阿彌陀佛は救ひの力、即ち慈悲で、愛の別語と言つても差支ありません。自力で聖道に進むことのできる善人よりも、善を爲す力を持たない惡人に、先づ救ひの力が加はるといふのは、まことに當然なことではないでせうか。こゝに又眞の愛の精神が、通俗の「かわいがる」などいふことゝ全く違つてゐる意味が発見されるでせう。

### 一〇、「かわいがる」とは違ふ

愛は通俗の「かわいがる」とは全く違ひます。それ故にまたその働きは、人を甘



やかすとは全くちがひます。愛は人を救ひ、人を育て、人を生かし、而て總てのものを一つに和合させる力の現はれでなくてはなりませんから、甘やかすことでは、愛の働きを成就し得ないばかりでなく、かへつて愛の精神をそこなひます。

人を救ふ道は一様でない。人を育てる方法も千差萬別である。和合には根本の要點がある。それは人とその心身の要件とに従つて、無限に變化します。肉体の病氣をなす方法にも、肉を割いたり、骨を削つたり、手や足を切り取つたり、非常な苦痛を與へるやうな、辛辣な外科的方法もあれば、温泉に浸つたり、按摩をとつたり、甘い藥を飲んだりする、快い方法もあり、冷やすことの必要な場合もあれば、暖めることの必要な場合もあるやうに、人の精神人格を救ふために、或る時は雷鳴のやうな怒りの形ちで、鞭を振ふ必要もあるでせう。或る時は忍耐深い笑ひの形で、絶えず慰め続ける必要もあるでせう。

愛から出る怒りは、その怒りを受ける人にとつては、あり難い怒りであり、傍

に立つ人にとつては快い怒りです。なに人でも同じ立場に立つた人に是認されるやうな、少くも人の氣持をせい／＼させる怒りでなくては、正しい怒りではありません。個人的主我的感情のみか 起る怒りは、ただ人を不愉快にする怒りです、道徳上の犯罪です、不正です、悪魔です。怒りとは精神的の破壊であるから、それは人に向つて、人格に向つて發せらるべきでない、唯「惡」に向つてのみ發せらるべきです。惡を退治する怒りが、惡自身であつてはなりません。主我的感情の怒りは、必ず人を憎む心から起ります。「惡」を憎む心と無關係です。従つて人生を清淨化することができません。のみならず、人生を汚します、傷けます、不幸にします。この怒りは斷じて許してはなりません。

人を育てるには、健康を要件としなくてはなりません。健康は正しい生活法、適當な生活法によつてのみ得られます。而て「正しい」といへば、すでに理想的なること、即ち原則に従ふことを意味し、「適當」といへば、必ず理想を以ての統一、



即ち抑制のあることを示して居りますから、人を育てる愛の一面には、嚴肅な權威の働くものがなくてはなりません。もちろんその權威は機械的に外部から加はる束縛ではなく、育つ方の中から、完全に育つために、自然に生まれる自己要求の働きであるのです。この要求に聽いて、その働きを十分にするとところに、却つて權威としての愛が現はれるのです。つまり理想的に育たうとする自己目的の具体化に外なりません。「人を生かす」といふのも、人格として、理想的に生かす外にないのであるから、そこに嚴肅な要件のあることは、すでにのべたことです。

愛は「和らぎ」です。總てのものが溶け合つて、一つになる働きです。しかし「とけ合ふ」といふことは、おせじや、愛嬌や、こびへつらひやによつてはできません。却つてそれらは、とけ合ふ心を隠すことになります。心の底のふれ合ひ、魂と魂とのふれ合ひによつて、始めて溶け合ふ作用が始まります。愛の和らぎは人格の和らぎ、理想の和らぎ、精神の和らぎ、即ち分化した箇体の、生命による

合一でなくてはなりません。その形式や順序は、實際の場合に無数の分化を生じませうから、これときめることは勿論出来ませんが、和合としての愛が、最も根本なところから出て、最も根本のところ、最も根本のところで一つになるといふ要點だけは、いつでも變ることがないのです。

### 一一、愛は生命の泉

愛は自然にわき出る生命の泉です。自然の自然ではない、人格の自然から、即ち物としての自然ではなく、人格の働きとしての自然からわき出るものです。細工によつて、強壓によつて出てくるものではありません。いろ／＼な小細工で人をだますやうなことをしたり、虚榮心や物質慾を満足させて、人を釣りよせたり、そんなことが愛の媒介になると考へてゐる人がありますが、そんなことは何等愛と交渉のある事柄ではなく、むしろ縁の遠い仕事です。それよりも愛と反對の方に驅け出す精神です。愛の輕蔑憫笑を買ふ外に、何の利益も得ることができません



ん。

何等かの威力を示して、愛を強制的に請求する人、涙を濫用し、感傷を以て愛を誘発しようと試みる人も、また的はづれです。愛の何たるを知つてゐないので。一方には愚しさを暴露し、一方には愛を追ひやる外に、何の獲物をも手にすることができない人です。

もし威力を用ゐようとならば、愛そのものゝ威力、愛の純真な本質から出る威力のみが、他の愛をせり出すことができます。愛の威力の外に、愛を呼び出す力は断じてありません。

或る意味に於て、愛は涙です。但しその涙は眼から流れる水滴ではありません。感傷で流す涙ではありません。魂が魂に流す涙です。生命を——人格を生かす涙です。むしろ物質を生命に、自然を人格にとかしこむ涙です。生命の泉です。天から降る甘露です。浅薄な感傷などは、似ても似つかないものです。

涙は強い感情の具体的なしるしとして、喜びにも、悲みにも流されます。しかも私どもの感情は、何に對しても最も強く動くべきでせうか。それは私どもの最も深い要求の目的に向つてはなくてはなりません。私どもの最も深い要求の何であるかは、既にしばしば申しました。その最も深い要求に關して、純粹に動く感情にのみ、眞の喜びがあり、眞の悲みがあります。この意味に於て喜びの涙も、悲みの涙も、その純真なものは、ただ一つに關して流されるべきです。實際に流される機會は。無數無限にあるでせう。けれどもその涙の泉の源は、その注ぎ入る海は、たゞ一つでなくてはなりません。

眞の感情は、要するに深い意味での同情です。人格と人格とが一つに相抱く感情、精神と精神とが一つに沁み合ひ、流れ合ひ、溶け合ふ感情、それは喜びにつれ、或は悲みにつれて、共鳴し合ふ生命の昂揚であつて、苟も精神を以つて相ふれる時、自然に人の内部から起らずには居ないのが同情です。強いるべきもので



もなく、強いられべきものでもありません。二つの人格的の魂が一つになるといふことは、外部の機械的作用によつて、上つらの小細工によつて、出来ることではない。又そんなことで押し止めることもできない。小さな私我を超えた、根本の精神の働きであるから、その根本に關係のない、私我的な何事にも動くものではありません。もし動くといふなら、それは偽りの同情です。

### 一一、同情

深い意味での同情とは、人格と人格とが一つになる働きの感情的側面であり、而て人格の本質は理想としての靈的生命であるから、同情の根柢には、崇敬、渴仰、憧憬の感情が動いてゐるはずで、この感情に裏付けられない同情は、眞の同情ではありません。或は精神的に徹底した同情ではありません。同情は畢竟愛といふことゝ同じものですが、たゞ愛の特殊な、消極的の働きと見るべきです。普通にいふ同情は、比較的に心の充ち足りてゐるものから、比較的に心の充ち足

らぬものに、注ぎかける形になつて現はれて居ります。而てこの傾向が更に強められると、煩悶、苦惱、窮乏、危険などの狭い特殊な状態にあるものに對して、慰安、救護などをさせるやうにする、その心持ちだけを指すことになります。さうすると遂に絶對的な人格の値うちを認めての、眞の同情の意義が忘れられ、階級的の「憐れみ」となり、「施し」となつて、却つて人格を汚すやうな關係にならなくてはなりません。通俗の同情にはこの程度のものが多いやうです。

困つてゐるもの、苦んでゐるものに對して憐れみの情を起すといふことは、人情の初歩であつて、貴い愛の種子ではありませんけれども、それが發達し醇化して、眞の同情にまで徹底しないと、人間としての生活を潤す力とはならないで、却つて人の精神を浪費するだけの徒勞に終ることになります。同情は人間の相互的生活の大地ともいふべきもので、これなしに二人以上の集團生活は、少くも道徳的に出来ないと言つてもいゝものであるだけ、その貴い意味をよく考へて、みだり



に安賣をしないことです。

同情が物質を媒介とし、個人に對して現はれた行爲が救助ですが、その殊に著しい場合は乞食者への施しでせう。具體的の實行にまでならなければ、同情は徹底しませんけれども、「物」を用ゐるときには、その意味が忘れられて、ただ物の授受そのことに値うちがあるやうに考へられ易い弊があります。極端になると、犬に食物をやるやうな、また犬が食物を貰ふやうな精神になり、態度になつて、全く人間の品位といふものを忘れてしまい、ただ與へるものは私我的の優越感の満足、受けるものは生物的の慾望の満足を得るに止まることになつて、人間性を腐らせてしまひす。

同様な同情の現はれが社會的になつたものは、いはゆる慈善事業と呼ばれるのですが、この慈善事業も、以前は單純な「物質の施し」であつたその弊害にだんだん氣がつき、ただ物資を給與するとりも、働くことのできるものには、できるだ

け仕事をする道を開いてやつて、自力で自分の生計を支へ、進んで幾分でも社會に貢献するといふ、獨立の人間の資格を保たせるやうに力める傾向になつて居ります。従つて名目も慈善事業でなく、社會事業と呼ぶやうになりました。つまり上の階級に立つものが、下の階級に居るものに惠むのではなく、平等の社會生活をしてゐる仲間お互ひが助け合ふといふ旨意になつたので、これは道德上の思想の大きな進歩といはなくてはなりません、但しこれは終局ではない、その精神に於て更に一步を進めることを要します。

### 一三、「キリツ」の數理

一体同胞たる平等の人間の間、從來の意味のやうな、「惠む」といふことのあるべき筈がありません。お互ひに助け合つて生きてゆく——理想を、人格を實現してゆくことがあるだけです。むしろ助け合ふといふ形に於て、一つ、人格的生命に融け合つてゆくだけです。而てその一つの人格的生命といふのは、私どもの無



上の要求の目的なのですから、助け合ふといふのは、個人間だけの関係で言ひ表はしたので、實は至上の神聖な値うちへの共同奉仕なのです。

他人を助けるとは、他人を通して、その中にも現はれてゐる貴きものに仕へるのです。それゆゑ社會生活の原則としての相互扶助は、即ち相互奉仕でなくてはなりません。自分の餘り物を他人に與へるのではない、自分の最も貴い物を至上者に捧げるのです。その形は一錢の金、一碗の飯であることもあるでせう、一枚の着物、一足の靴であることもあるでせう。けれどもその實質内容は自分の全精神、全人格でなくてはなりません。

わが最も貴いものに仕へるのには、わが持つものゝうちの最も貴いもので仕へないのは偽りです。捧げるのに、わが持つてゐる總てのものを捧げないのは偽りです。「まこと」とは、最も貴重なもの、總てのものを捧げることによつて示される心の姿でなくて、何でせう。

「富者の万燈より貧者の一燈」といふことわざがあります。貴かるべき万箇の燈明よりも、一つの燈明の方がなせ貴いか。神佛を離れた人間だけの値ぶみでは、一つよりも万の方が貴いに相違ありません。一圓貫ふか、万圓貫ふかと擇ばせるなら、まづ大抵万圓の方を取るでせう。神佛への奉納の時には、どうしてその値うちが顛倒されるのでせうか。

いふまでもなく「まこと」或は真心の「多少」といふよりも「有無」です。本質の上からいふと、真心に多少といふことはありません。純でなければ真心とはいへないのに、「多」といへば既に不純を残して居ることを示して居ります。偽りのあることを示して居ります。「偽りを含むまこと」といふものはないのです。

十萬圓持つてゐるものが一萬圓寄附しても、あとにはまだ九萬圓残つて居ります。一圓きり持たないものが一圓寄附すれば、残るところは何にもありません。つまり零です。物質だけの經濟上の値うちは、一萬圓が一圓の一万倍です。けれ



ども精神の値うちからすると、十万圓持つ者の一万圓は十分の一、一圓きり持たない者の一圓は一分の一、即ち一で、そこに十分の九の差があることになります。更に殘高との比例でいふと、十分の一に對する無限大といふ比較になります。持つてゐる者の少部分だけを割いて出すのと、その全部を出す者と、何れが貴いか、その何れが純か、そのいづれに「まこと」があるか、なせ富者の万燈より貧者の一燈の方が貴いか、もはやこの上の説明はいりません。

#### 一四、親子と夫婦

一切の人格交渉は智的にも、情的にも、最上の値うち、絶對の理想に發出して、またそれを目指す働きでなくてはなりません。言葉を換へれば、常に最も高貴な生命によつて裏づけられてゐなくてはなりません、親子の關係も、夫婦の關係も、兄弟の關係も、主従の關係も、友人の關係も、團體的關係も、それが人間の資格、即ち人格に於てであるかぎり——人格に於てでなければそれ等

の關係は固より無意義、或はなりたちませんが——至上絶對の要求の充足として成りたゝねばなりません。さもなければ、それは假りのもの、偽りのもの、私我のもの、偶然なもの、機械的な宿命の遊戯になつてしまひます、親子の關係が若しこの理想に立脚しなければ、親は子を以て自己の私有物と考へ、自分一箇の慾望次第に、どんなにでも左右できるものときめてしまひます。また子は親を以て自分を育てゝくれる方便のやうに考へ、どんな慾求でも満足させてくれる筈のものとときめてしまひます。斯うなると、親子の交渉はただ人格を害し合ふ外に、何の益もないものにならなくてはなりません、親は高貴な生命を代表して子に臨み、肉私我の子ではなく、高貴な生命の子として産み育て、又子は高貴な生命の代表として親を仰ぎ、肉的個身の親を通して、高貴な生命の親に仕へ、かくて親子と、互ひに貴きものへの奉仕として相交渉するとき、そこに初めて眞の慈、眞の孝が、眞の愛、即ち至上の生命の働きとし現はれてまゐります。親子關係はも



はや偶然な生物的宿命でなく、必然にして而も永遠な理想の實現であつて、肉的關係はただその過程の最初の段階たるにすぎないことゝなるわけです。

夫婦關係も理窟は同じことです。ただ形の上では、親子は新舊先後の關係、大小強弱の關係で、一つの個体生命が二つに分化してゆくのに對して、夫婦では同時的で、對等で、二つの個体生命が一つに綜合される關係に立つ點に於て異つてゐます。而て發動の順序方向は違ひますけれども、肉体的、生物的、自然的要件を關係の基礎とすることに於て、ごちらも共通です。それ故にまた現實の愛情は親子、殊に母子の間に最も早く深く現はれ、夫婦關係に於て、最後の完成に高められるといふ差別はあるけれども、いづれも共に、最も具体的な愛の働きが見られ、最も強固な交渉が成り立ちます。それだけに具体的な關係に縛られて、精神的理想的交渉の自由が、知らぬ間に狭められてゐるといふ弊を生じ易く、自然生活以上の人格的、文化的生活を發展させないで終る場合が多くなりがちです。こ

の點は親子夫婦の關係に於て、他の人間關係よりも、一層反省と努力とが、眞愛の發現のために要求されるころなのです。言へかへると、親子夫婦間に於ける自然感情は、最も安易で、しかも強烈なだけ、愛即ち自由の働きであるところの、人の精神的發展を抑制する力も、また従つて大きいことを知つてゐなくてはなりません。

支那の古い教へに、「父子親あり」夫婦別あり」といふことがあります。これは實に深い洞察を含んだ金言であらうと思はれます。これは親子の間、及び夫婦の間に於ける人格的愛の實現の原則、或はその愛を全くする要件を掲げたものに相違ないのであるから、「親あるべし」「別あるべし」の意味と解すべきでせう。さうすると、親子は個体の分化に出發するがために、人格關係の分離にまで走り易く、夫婦は肉体的結合に基礎を置くがために、自然感情の満足で終り易い。そこで親子間に於ては、親愛和合の精神を、生長すると共に深めてゆく努力が必要で



あり、夫婦間に於ては、反省と批判との態度を、まづ始めに要求しなくてはならない。この方針に依つて、孰れも眞愛の發動實現を、誤りなくすることができるといふのであらうと思はれもす。

#### 一五、人格關係の基礎——友情

人格の意義からすると、總ての人は友人關係を以て、共通の基礎とするものと言はなくてはなりません。親子も夫婦も、精神的にはもちろんさうであるべきです。人はすべて人格者である以上、それ〴〵皆獨立の立場を以て交渉して、精神的融合に進むべきであるから、この點に於て、如何なる人も、最深義の友人關係から、種々の特殊關係に分化してゆくのであると解されます。つまり友人關係は、自然的には究極であるが、文化的には出發點なのです。

もし親子關係でいふならば、なに人も唯一の生命、即ち根本人格から發出してゐるのであるから、この生命に對して親子なのであり、従つて總ての人は、悉く

一つ親の腹から出た兄弟姉妹です。この根據を外にして、四海同胞といふ、言葉の出處はありません。現實の兄弟姉妹は、ただ肉体的發生の先後といふ、一つの特殊の場合にすぎないのであるから、肉体以外の條件によるときには、兄が弟に、弟が兄に、親が弟に、子が兄になることもあるべきです。現に科學的にその發達の程度を見れば、たとひ戸籍上同年齡の人でも、生理年齡、心理年齡の上に差等のあることは、誰でも知つてゐるところです。この事から推して、又經驗上からして、人格年齡の差等は更に大きいものがあらうと思はれます。たとひ自分より年少の人であつても、人格の發達に於て先輩である以上、その人の精神には、尊敬を盡くして兄事しなくてはなりません。自然的の親とか兄とか先輩とかいふ地位に拘はる必要はないのです。これは年齢に事へるのではなく、私どもが追求して止まない値うち、即ち人格或は理想に事へるのであつて、つまり要求實現の過程であるからなのです。



しかしとにかく、人と人との精神的關係の最も共通的なものは友人關係であるから、その關係の内容力となるこの友情、或は友愛は、對人道德の根本であるとしなくてはなりません。人の交りには、仕事に由來するもの、趣味に由來するもの、知識に由來するもの、住處に由來するものなどいろいろありますが、そのいずれの場合でも一貫して必要な要件は、必ず道德の根柢を持たなければならぬことであつて、而てその道德は人格的の眞愛、即ち最善の理想、値うちを追求する熱情に發するものでなくてはなりません。言ひかへると、友人は至上なるものを共通目標とする生活の共鳴者、共働者、即ち同じ人の道を踐みゆく「お同行」でなくてはなりません。この最高の道義的媒介を持たない友は、臨時偶然の知り合ひであつて、眞の友といふことができないのです。

實行上の關係は、慰め合ふ、教へ合ふ、助け合ふといふ具體的の關係を持つのであり、又もつべきであるが、それは部分皮相の感情や、知識や、物質だけに終

局してはなりません。人格の意味に徹しない、表面機械的の交渉は、たとひその努力、その材料が大量であつても、眞の友愛であることができないのです。せひともお互ひの精神に、高貴な背景があり、表面の言葉や物質は、その高貴な値うちのしるしとなり、至上の理想の實現となるものであることを要します。従つて又お互ひの個人に就いていへば、一つの生命の發展の形として、共に精神的に、理想的に醇化し合ひ、生長し合ふ結果を生ずることを要します。つまり友愛は奉仕の最も具體的な、純な形なのです。

消極的にいへば、他人のどんなところに値うちを置いて親交するかは、直ちにその人自身の人格内容の説明ですが、とにかく精神的に自己より優れた人を見出して、仰いでこれに師事しないで、むしろ自身より劣位にあるものを喜んで、これに親狎するといふ頹廢的傾向は、最も輕蔑しなくてはなりません。



普通の兄弟姉妹は肉縁關係の上に立つために、この特殊な具體的な要件によつて、友愛は一層強められるわけです。學ばず、努力せず、自然關係によつてその愛が誘導されるのであるから、眞の友愛、或は人格關係に進む入門であると言つてよろしいでせう。

けれども兄弟姉妹の肉縁關係はまだ間接です。夫婦になると、それは直接なものになりますから、友愛の特殊具體化は極點に達し、その實現が最も強大な筈です。それだけまた特殊具體の形に囚はれ、狭小な部分的な世界——官能の世界に押込められて、深い、眞の友愛の實現にまで發展し得ない危険の多いことは、前にも申しました。戀愛生活、結婚生活に於て、信仰——理想の憧憬欣求を共通に持つ、或は神の媒介といふことを、特に最も必要とする所以です。

夫婦間の道德として最も重く視られてゐるのは、貞操といふことです。貞操の精神的意義は、愛の純一恒久といふことにあるでせうが、貞操がなせさやうに重

く視られてゐるか。多分は「種」の存続の形によつて、自己の發展を具體化永久化しようとする、生命慾そのものから起るといふ説明もありますが、これだけでは道德としての意義が不十分です。わが國に於て、家系の純一を保ち、家族制度を維持するためといふ理由から、特に婦人に對してのみ貞操の徳を要求したのは、元來功利的な考へ方なのであるから、眞の道德的權威を持つことができません。貞操は夫婦共通の平等な道德です。男女の性別は形の上に在るにしても、一つの結婚生活を構成して、その相互關係に於てのみ進展する愛の現はれとしての必須的道德が、その一方には必要であり、一方には必要でないといふわけのあるはずがありません。

一体道德といふものは、人格關係であつて、孤立した箇々人間に於ける機械的關係でない。相手が限られた箇体であるにしても、その中に、共通の、或は一般的な精神的意義を認めた後に、初めて起るものです。一般的な精神的意義とは、な



に人にも承認さるべき値うちであるところの、理想に生きるといふこと、即ち人格を持つてゐるといふこと、その人格の發動の機關として、意志や自我があつて、至善に向つて自律的生活をしてゆくことでありまして、自發的に至善を追求せず居ることのできない心持ち、無限に高きものに對する無限の思慕、即ち理性愛が道德の根本と言つてよろしいのですから、從て各自は各自の内面にある、この人としての生命たる至善に向つて、總てを捧げつくして、恒久の純一な態度を保たなくてはなりません。この人格の統一性、愛の純一性、これが即ち貞操の徳の根本なのです。

貞操はまづ自己に對する自己の道德であるべきです。自己の裏にある理想、即ち眞の我れに對する信順の恒久純一でないもの、自己に對して不信なもの、二心あるものが、どうして他人に對して、他人の人格に對して、貞操を守ることができらるでせう。他に對する貞操は、せひともまづ對自己の貞操——永久の堅信專念を

豫想しなくてはなりません。自己の人格の純一恒久を豫想しなくてはなりません。この道德的根據を内面に持たないものは、貞操の事を談ずる資格のない人です。

總ての人に人格——少くともその種子——を豫想する以上、貞操の徳は自己に對すると同様、總ての人に對して守られるべきです。唯現實の個人に於ては、その人格の發達實現に程度様式がそれ／＼異つて居り、從つてその人格の本質に於て、總ての人が具体的に契合するまでになつてゐないため、現實に貞操の徳を完全に守るだけの、深い關係になつてはゐませんが、少くも友愛關係を現實に結び得た人の間に於ては、そこに必然貞操の徳が発生する筈です。而て夫婦は前述のやうに、最も深い、堅い特殊の友愛關係に於て結合してゐるものであるから、そこで特に夫婦間に貞操の徳が強く要求されることになるのです。

要するに夫婦間に於ける貞操の徳は、性質の問題でなく、程度方式の問題なのであつて、その重大なのは、夫婦間に限られるためでなく、却つて何人の間にも



あるべき、一般的な人類道德の、最も顕著な實現の場合であるがためなのです、

### 一七、家庭生活と、その本質的な争ひ

家庭といふのは、夫婦、親子、兄弟姉妹などの、直接又は最近親の肉縁關係者によつて、自然的に結合組織されてゐる最小團の生活体です。

家庭は直接の肉縁關係を基礎とするところから、その關係が具体的であり、又人が作るといふより生まれ出た感があり、従つて自然感情が他の智的工夫や、意的努力を包んで、最も濃厚でありますから、その結合組織は最も容易で、しかも最も強固なところがあります。この點が他の種々の社會的生活團と違ふところで、同時に社會生活のあらゆる要素を含んで、それが圓く、柔らかに溶かし合はされてゐます。それゆる家庭は國家社會の基礎であるとして、道德上甚だ重視され、殊にわが國では、家族制度が社會組織の傳統的基礎であるといふ見解から、他の諸國よりも、更に家庭といふことが重んぜられてゐるのです。

家庭生活の長所も、短所も、前述の自然關係で出來てゐる社會であることに由来します。工夫や努力によらない、而も最も情的の潤ひに充ちた共同生活によつて、半ば無意識の間に相互奉仕のできてゆくのが、他に得がたい長所であるのですが、また夫婦親子關係に就てのべたと同様の、強い自然感情に囚はれて、生活の理想的醇化に進み得ない、自然社會のまゝに徘徊して、文化社會に進み得ないといふ、大きな危険もまたそこに伏在して居ります。殊にその上に傳統や習慣の力が加つて來る場合には、それだけ前述の家庭生活の長所を一層安易堅固にする一面、向上精進の意氣に對する束縛も、またそれだけ強大になるわけですから、その長處を伸ばし、缺點を除くための、智的工夫と意的努力とが、裏面に於て常に活動しなくてはなりません。この工夫と努力との如何によつて、家庭が人間性にとつ非常に有力な機關となることもできれば、また大へん有害な牢獄となることもあります。



現實の家庭生活を精密に、且つ明晰に觀察して見たなら、右の善惡いづれかの場合の例證を發見するに難くないでせう。私どもが最大の要求とするところから見れば、普通にいふ圓滿な家庭、幸福な家庭、楽しい家庭が、必ずしも値うちの高い家庭でなく、見かけの不満な家庭、不幸な家庭、苦しい家庭が、人道の上から、必ずしも低劣な家庭ではありません。

人間性と動物性、理想と現實、文化と自然との争ひが、一個人の内部に常に存在すると同じことに、一家庭の中にも常にあるはずで。その争ひのないのは、向上し切つた家庭か、さもなくば人間的要求を持たない家庭かでなければなりません。(この種の家庭には利慾、私我感情の争ひが散漫に必ずあるはずで)而も向上し切つた家庭といふものが、現實にあるでせうか。私ども不完全な人間が、よい加減に一しよに集まつてゐる家庭で、十分な精神的統一の容易にできるものではない以上、家庭を高貴なものに醇化するための努力が、常に強大でなくてはなら

ないでせう。而てこの努力の強大であればあるほど、これに對する自然的要素、習慣的要素の抵抗も強大であるわけですから、従つてそこに烈しい戦ひも起らないでせう。なくてはなりません。

その上、現實の世界は決して私どもの高貴な願ひを充たすやうになつてゐないのみならず、物質的生活資料の配當すら不十分極まる世界です。この間にある家庭といふもの、對社會的關係から言つても、精神的に、物質的に、文字通り安泰で幸福であることは、先づ以て不可能といつても、敢て差支へはないでせう。それゆゑに見かけの幸不幸といふことは、現實に於てあまり問題になりません。ただ問題は、どんな性質の不和があるか、不幸は何から來てゐるか、苦しみに對する家族の態度精神如何といふことでせう。

#### 一八、家庭と社會

或る人々は家庭生活と社會生活との間に、はつきりした區別をつけて、できる



だけ社會的二重生活をしようとしてゐるかのやうに見えて居ります。それは精神的、外形的との二方面にわけて見られるやうですが、精神的といふのは、社會が不安不快苦痛罪惡に充ちた修羅道であるに對して、家庭は安穩幸福快樂に充ちた、休息處、慰安處、避難處、天國極樂である、少くもさうあるべきだといふ類の見方を申します。外形的とは、社會が、十分謹慎して、言語動作を上品にし、見るを作り、非難をうけないやうに骨を折らなければならぬところであるに對して、家庭では、ごんなわがまをしても、無作法にふるまつてもよろしい、つゝしむとか、氣をつけるとかいふ努力のない、野放しの生活の許されるところに、家庭のあり難みがあるといふ見方を申します。

現實に於て、この見方には尤もなところがあります。家庭は關係の密な、ましまりのいゝ、精味の濃い、そして對人關係に工夫や努力の比較的にならない特殊社會であるから、大体に於て、一般の廣い社會よりも安易な感じがするところに

相違ありません。ただでさへ寢食を共にするといふことは、共同生活の最も具體的な形であるのに、その上まごまり易い少數の肉縁關係の上に成立つてゐるのであるから、社會的共同生活の感情的満足を、最も多く家庭に於て經驗されるわけです。

共通の感情、思想、意志、又地位財産等の上に生活の基礎を置く生活、而も之がために特に努力を要しないやうな自然關係で成立つといふことは、家庭生活を特に安易な、自由なものにしてゐる本質的要件と思はれますが、しかしこれは家庭にのみ存在する獨特の要件ではありません。ただ家庭は少數の肉縁關係といふ要件で、その容易な成立充實を助けてゐるだけです。或は一般社會には、しかああるべき共通の理想の一面が、まだよく實現されないものであるのに、家庭に於ては、自然的要件に助けられて、早く實現されてゐるものと見るべきでせう。理論的に考へても、家庭がやはり相互的、共同的の社會生活の一種である以上、少數者の



肉縁關係といふ要件以外に、本質的に違つたものである筈がなく、社會生活一般の原則精神利害得失は、家庭にも當然なければなりません。この事は家庭と一般社會とを仔細に觀察比較して見るなら、容易にうなづけることゝ思はれます。

さうであるとする、一般社會と家庭とを本質的に別なものとする理由はないのであつて、ただ生活理想の發達實現の程度様式を、多少異にしてゐるだけであると見なくてはなりません。又さもなくしては、家庭が社會の基礎であるとする理由は立たないのです。又その結果の上から見ても、家庭と社會とに、天國と地獄とのやうな差別をつけることは、社會の發達を害することゝなるでせう。

#### 一九、家庭を全然別天地と見る誤り

家庭と一般社會とを全然別なものとする理由がないのみならず、強て別なものとするのはいけないとすると、その生活の根本原則精神態度等に於ても、發現の程度様式のほか、本質的には同一であるべきです。外形上のことだけで言つても、

家庭には家庭の秩序禮儀作法といふものがなければなりません。それがなくてはいかなる意味でも、一人以上の共同生活が滑らかに運んでゆく筈がないのです。家族がすべて人格的の値うちに於て平等であり、各人の意志の自由が尊重されなくてはならないといふことは、誰にも適用される規律がないといふ結論を作りません。もし一人が不規律放縱であれば、その程度に於て混亂が起り、従つて他の人の生活はそれだけ害されます。つまり家庭で謹慎や注意が要らないといふのは、一般社會と同一形式のそれは要らないといふことなのであつて、原則上要らないといふことではありません。

不規律不謹慎を文字通りに解釋して、それを家庭に實行するとすれば、結局強い者がちの動物社會に墮ちてしまはなければなりません。その上、社會に出ては謹慎する、家庭ではわがまゝをするといふやうな二元的生活は、人格の意義から見て許されないことであるのみならず、私どもの堪へ得ないことです。



外形が自分より上の者とか、自分の利益になる者とかには丁寧を極め、見すばらしいやうな者とか、直接利益にもなりさうもない者とかには横柄冷淡を極めるやうな、人格觀念を持たない人を折々見た場合、その二元生活の醜体に、誰しも不愉快を感せずには居れないでせう。

他人の中に出たときに、わざと人もなげなわがまゝをするのも、反對にいやに固く、ごごちなくなつたりするの、共に家庭内では無作法わがまゝで日を暮らしてゐる人間の現はれです。婦人には固くなる側の人か、また急にていねいになる人かが多いやうですが、それがたとひ故意に出たものでなくても、平生の習慣と反することは、決して具合よく行くものでありません。自分はうまくやつたつもりでも、他人にはその表裏がはつきりわかります。そして結局輕蔑を買ふにすぎないこととなります。一体他人の目や耳をごまかせると思ふのは、他人が自分より馬鹿だと考へるからで、その人自身が馬鹿であることの廣告にすぎません。

わがまゝや不法法によつて、他人に不快や不利益を與へることがいけないことなら、家庭に於ても原則は同じことであるべきです。ただ家庭に於ては多少様式が違ひ、それが比較的自然に、情味の發露として出来るのであつて、特別の注意なしにできることを、必要のないことゝ混同してはなりません。要するに人格に對する敬愛は、家庭に於ても勿論あるべき筈です。人格に對する敬愛のある以上、その發露の形式としての禮儀作法はあるべき筈です。必ずしも習慣的一般社會的の形式の意味ではなく、敬愛の情の發露が、自然に作り出す、家庭的生活の作法といふものは、せひあるべき筈です。

## 二〇、家庭の任務

自然的情味に包まれた、暖かな沾ひは、他の團體生活から區別させる。家庭といふものゝ非常な強みであるが、しかしそれがために、理想的精神的實現向上を忘れさせる危険もまた大きいことは前に申しました。人間的向上の努力を忘れて、



ただその自然的情味の満足に安んずるとき、家庭はその性質に於て、忽ち豚小屋となり、牢獄となるのであつて、いかにその程度に於ける満足幸福の自感が家族にあるにしても、人間の家庭であるかぎりには、一味の精神的清風が常にその上に通つてゐることを要するのです。けれどもこの一事は、たゞさやうな消極的對症的の要求からのみでない、家庭といふものゝ、重大な積極的要求であることを考へなければなりません。

積極的要求とは何であるか。濃厚な情味の暖かな沾ひは、實に一切生命の生長する最重要の田地、或は要素なのであつて、この一要素の缺けてゐるところでは、いかに高尚深遠な理想でも、精神でも、石の上に蒔かれた種子と同じく、決して發育することはありません。もし或る家の入口に立つて、何となく冷たい寒い感じの身に沁むやうなことがあるなら、そこは人格的生命の成長しないところと判断して差支へがないでせう。それは學校でもどこでも同じことです。舌や筆での

説明はいかやうにもできません。けれども清淨な心の鏡に映る、直覺的具體的の感じに於ては、偽り飾ることができません。で、家庭に於ける濃厚な情味の漂ひは、まづ人格的生命を育てる田地肥料が十分に具つてゐることを示すものです。

たゞ田地肥料はどこまでも田地肥料です。それだけではどうにもなりやうがない。せひともそこに人格の種子をまきつけて理性的の愛——眞の愛にまで醱酵させ、人間といふものを養育する、働きをさせなくてはならない。その場合として家庭は絶好のものであるのです。つまり人間の苗床として、家庭はせひ必要なもの——永遠に必要なかどうか疑はれるが——で、現在ではこれに代る社會生活を一般に見出すことができません。この點に於て、家庭は人間に對して、又その基礎の上に立つてゐる一般社會に對して、重大な責任を負うてゐるものです。わがまゝのしどころとか、安息處とかいふやうな、低級機關で止まつてゐてはならないのです。それすらも出来ない我利の修羅道は固より問題になりませんが、



官能の臭氣、情緒の叫喚の紛々擾々たる豚小屋では、人間の要求を充たすことが  
できず、社會の負担をすることができないのみでなく、家庭自身の貴い値うちを  
こわし、重大な使命を棄て、しまふものと言はなくてはなりません。

社會が果して不快な危険な荒海ならば、而して人間は安息の場所を要するなら  
ば、私どもはそれを改造して、人間の安らかに、楽しく住むべき一大家庭としな  
なくてはならない筈です。然るにその社會を現在作つてゐる人は、皆家庭に育ち、  
家庭を持つて、家庭から派出されてゐるものである以上、社會のわるいのも、家  
庭に責任があるとしなくてはならないでせう。社會は辛いところ、家庭は楽しい  
ところと言つてすましてゐるのは、無智と無責任との甚しいものです。この點か  
ら言つても、社會の改造のために、家庭は善い社會を作る人間の苗床、人格の哺  
育場、精神理想の發酵地たる本來の使命を、徹底的に果すべき義務を負うてゐる  
ものです。

家庭の對人間社會的任務と値うちは、實に重大です。自然から附與されてゐる  
豊かな要素と能力とを「寶の持腐れ」としないやうに、それを人間と社會との精神  
的養分として、値うちを現實に發揮するやうに、家庭の自然的要素を人間化するや  
うに、家庭の組織と運用との工夫努力が、十分に用ゐられなくてはなりません。

## 二一、社會生活と不斷の改造

理想的論理の上からはもちろん、現在の人たちの實際的要求からしても、社會  
といふものは、現在のやうに利害打算の入りまじり、人間同志の噛み合ひの場處  
であつてはこまります。平穩無事な場合には、社交や儀禮の道具を並べ、義理や  
人情を飾りにしてゐるが、實際生活上の慾求に觸れてくると、忽ちに修羅道の醜  
態を現はすのは、決して人間の活動世界の木質でない筈です。

もちろん現在の社會とても、一から十まで非人間的な生活ばかりではない、善  
い、美しい文化的現象は澤山に見られます。歴史上にもありました。さうしてま



た人間的傾向が發達して來てゐることも事實です。けれども世間に立派なこととして讚嘆渴仰されてゐるやうなことは、實は大てい文化社會として、人格的生活の様式として當然なことであるのに、それが特にもてはやされのは、一般の人の要求がどこにあるかを示すと同時に、現實の社會生活が、どんな位置にあるかを説明するものと見なくてはなりません。

人間の要求からすると、社會と家庭とは全く別なものであつてはこまります。生活が二元に分れてはこまります。社會が修羅場で、家庭が避難處であつてはこまります。全生涯、全生活を一貫して、人間性の満足の得られるやうに、家庭も社會も組織活用されなくてはこまります。してみると、どうしても社會も家庭も、ともに人間性の發露乃至は満足としての、共通の原理の上に立たなければならぬといふことになるでせう。更に言ふと、社會は家庭の延長としての一大家庭であり、また家庭は社會の縮圖としての一小社會であり、いづれも違つた要件を持

ちながら、同一原則によつて、人間の要求を満足させるものであり、共通的に、又補充的に、人間性或は人格を完成させるものでなくてはならないことになりませう。而て現在の社會に、この目的に適するやうになつてゐないところが澤山あるとすると、その社會の組織員たる私どもは、どうしても改善の努力をしなくてはならないことになります。この努力を吝むといふのは、要するに自分の生活に眞摯忠實でないといふ告白であることになります。

更に又根本的に考へますと、人間の要求には行止まりといふものはありません。袋小路といふものはありません。従つて理想の實現は無限軌道の過程です。ですからよし社會が現在に於て満足完全なものであるやうでも、私どもが進むに従ひ、どこかに不満足不完全なところが社會に見えて來て、私どもの要求理想には合はないものとなり、そこに必然改善せねばならないといふ意見を生み出すことになりませう。それゆゑに理想に生きるものにとつて、即ち人間として生きようとする



るものにとつて、常に社會改造の意氣を以つて生活してゆくといふことは、いつでも、なに人にも、とりのけなしの運命であると言はなくてはなりません。

いづれの場合にしても、人間として自分の生活に眞摯忠實である限りは、その家庭に對すると同じく、改造醇化の態度を以つて、社會を一層文化的ならしめる努力を生活の内容としなくてはならない點に於て、一つ道筋に進むわけです。

## 二二、社會改造の道德的原則

それならば社會改造を結果する生活は、如何なる方針目標によつて指導されなくてはならないでせうか。形式的にいへば、社會の成立原理、或は社會生活の理想を、完全に發展させることであるといふ一言につゞめられるでせう。

社會は何ひとかの手工で、勝手に造り出された機械ではありません。人間それ自身の要求、といふよりも、生命そのもの、人間的發現の一樣式として生み出された、一全体の生き物です。各個人を外にして、別に社會といふ一箇体を見るこ

とはできませんが、しかしとにかく現實に存在するもので、しかも總ての個人をその中に包含してゐる活動態です。してみると、社會の原則といふものも、總ての個人に含まれながら、又總ての個人を超越して活動する、自律的の生命であつて、従つてそれ自身の要求を持ち、理想を持つて進歩發展するものです。平たくいふと、社會といふものはそれ自身の要求理想原理に生きる生活体であるはずで、ただ社會の要求理想原理は、本質に於て、個人のそれと共通なものであるのです。

それゆる社會生活の原理も、各個人がその止み難き根本要求の、最も純眞な本質を發揮してゆけばいいわけですが、しかし社會は平等の對人關係——個人の立場でいへば——の上に進展するのですから、對人關係に於ける理想の發揮、即ち「友愛」を原則として、總ての交渉が行はれ、ばいいわけになるでせう。

友愛の具体化は、各個人が至上善への醇化、又は至上善が我れへの實現を意味



する相互奉仕であるから、従つて社會生活の實務は、個人間に於ても、社會と個人との間に於ても、すべて相互奉仕でなくてはなりません。反對の方からいへば、苟も社會生活に於ては、友愛の精神に發しないもの、相互奉仕の態度に依らないものは、いかに壯大な仕事でも、社會生活の本旨に反し、従つて社會生活を不幸にするがゆゑに、すべて排斥しなくてはなりません。

この方針をとることによつて、個人と家庭と社會とは、一貫した共通の生活となり、個人と家庭と社會とは、同一精神に統一され、而て社會生活が眞に人類を生かし、人格を育てる力となることができるわけです。教化に於ても、政治に於ても、産業に於ても、相互奉仕の態度のあるかないか、多か少かによつて、その仕事の眞偽善惡の判断が下されます。而て相互奉仕に反するやり方を、出来るだけ打滅ぼして、完全な相互奉仕の實行にしてゆかなければなりません。これが社會改善の根本方針です。而もこれは改善のための臨機の方策ではない、實は社會生

活方式の常道なのです。常道でないものは、眞の改善の方法とならないことは、一時病氣を喰ひ止める薬が、眞に健康を回復する滋養にはならず、眞に健康を増進する方法は、日常の食物を最も適當に按配するにあると同じ事なのです。

### 二三、社會と共同奉仕の一全体

社會的生活、或は團体的生活の一切の形式は、その種類がいかに違つてゐても、要するに奉仕によつてのみ道德的意義を充實する、組織的の生活体です。而して奉仕の目標は前にも言つたやうに、各個人のもので、又同時に共通であるところの生命、各個人に内在して、又同時に超越的であるところの至上善なるものを、個人の上に實現し、或は個人をそれに醇化し、かくてその至上善なる精神的生命によつて統一された、一全体を形つくるにあります。

この至上善なるものは、個人の中に現はれるやうに、社會の中に現はれる。而て社會に現はれた側面は、既に個人のものでなく、個人を超越したものであるか



ら、この社會的至上善を目標として社會に盡くすことは、自己の私を捨て、至上善なるものに奉仕する、大きな階梯となるわけです。而て社會を組織してゐる各人は總てこの目標に對して同じ努力をするのですから、社會生活は即ち共同奉仕の生活に外なりません。

社會の各種機關は、いづれも皆この共同奉仕の實務をそれごとくに行ふために造られるべきもので、凡そ人間社會が造り出す機關にして、この目的を持たないものは一つもあるはずがありません。もしあるといふなら、それは偽りの機關です。それは社會的の名を冠つて、實は非社會的なものであるのです。

又この社會を組み立てゝゐる各個人は、それごとくの関係によつて相互奉仕の生活をすると同時に、どれかの社會的機關の運用に参加して、共同奉仕の實功を顯はさなくてはなりません。もしそれをしない人があるなら、それは非社會人です。而て非社會人は「人間」の生活を認めないものですから、従つて非人間です、自然

生物です。

各個人を外にして、社會を組み立てる具体内容はないのであるから、各個人は皆それごとく社會全体の責任を負うてゐるのであり、又社會は共同の一全体であるが故に、一個人に關したことも、その責任は全体の上にあることになります。この旨意のゆきわたる程度に於て、その社會は完全に近づき、従つて又各個人が人間に近づくことは、申すまでもないのです。換言すれば、各人お互ひが責任を負ひ合ひ、各人の一人々々がすべて全体の責任を負ひ、而てまた全体が、その一人の責任をも十分に負ふといふ生活の、徹底的に成り立つたとき、人の生活は社會的に完全になるわけです。

私どもが人間である限り、人間社會の人であるかぎり、斯の如き社會生活の完成を、何等かの關係と、方式と、機關とによつて力めるべき義務を負うてゐることを忘れてはなりません。



現實の社會に於ては、無智から來る過失でか、又は横着から來る罪惡でか、前述のやうな社會的の義務を盡さずに、外形の立派らしい生活をしてゐるものもな  
いではありません。又文明社會など言ひながら、無勢力な個人に對しては、十分な責任を盡さずに居る社會もありませんが、それは許容さるべきことであるからではないのです。教育と政治との力によつて、このやうな個人と社會との不完全が、できるだけ早く無くされなくてはならないのです。

#### 二四、職業と勞働と仕事

社會に必要な、系統的の仕事により、各個人が、自分の才能と努力とを用ゐて、奉仕の實功を、社會に貢獻する形式が職業であつて、その職業の内容となり、職業を具體的な生産とする各個人の働きの勞働です。それで普通に「仕事」といふと、或る場合には「職業」を意味し、或る場合には「勞働」を意味することになつてゐます。

或る目的を持ち、手段によつて努力するところの仕事といふことは、全く孤立した一個人にもあるわけですが、しかし現實に於て、全く社會的生活をしない個人が考へられないと同じく、全く社會と交渉のない仕事を考へることができません。従つて何等かの意味での職業的性質を持たない仕事といふものは、殆どないと言つていゝ位です。ですから勞働の内容的意義も固より廣いもので、或る目的手段によつて努力することですけれども、今日では職業に於ての努力を指し、その中でも更に狭く、最も外形的な肉体的勞働のみを指す習慣になつてしまつて居ります。これは本質的の意味でないことを、別に説明するまでもないでせう。

從來仕事とか、勞働とか、職業とかいふことを下賤なものとし、何もせずに、遊んで暮らすのが貴いことである、即ち人生の幸福である、目的であるとする考へ方は、かなりに廣く行きわたつて居りました。なせこんな明瞭にまちがひ切つた考へ方が、多くの人に是認されてゐたか、それには固より相當の原因があるこ



きなのですけれども、今日ではおひく／＼そのまぢがひであることを知つた人が、多くなりつゝあるやうです。ただ今日でもあまり訂正されてゐない考へ方は、職業、従つて仕事、労働を「金を取る手段」とばかり見てゐることです。

初めにも言つた通り、職業は決して金を取る手段ではありません。まるで反對に、自分を社會に捧げる方法です。もし自然主義的立場を取つて言つても、自分の天才乃至能力を社會に發揮する、即ち具体化する方法です。兩方をまとめて言へば、個人が社會的に生きる仕方なのです。それをまた言ひかへると、自己を社會的に造り出す方法ともなるでせう。

社會の側からすると、社會の活動進展といふことも、各個人の職業を種々の系統に組織し、更にそれを一つに綜合してゆく過程の外にはありません。即ち各個人の職業は社會の活動進展の内容そのものであつて、社會の動的要件として缺くべからざるものであるから、各個人が職業に就いて労働することを、せひとも要

求しなくてはならないのです。

もし職業を「金を取る手段」であるとする、それは個人が社會を生存の手段とすることになります。社會は自身に獨立の意味を持つてゐるもので、決して個人の道具として存在するものではありません。又社會が職業による各個人の勞力、乃至その生産を買ひ取るために金を拂ふものとする、それはやはり各個人を社會の道具とするもので、個人の意義に反することになります。いづれにしても、職業を金的手段として解釋することはまぢがひです。

### 二五、職業と生活

職業が金を取る手段でないとする、生活費をどうするかといふ疑問が起るでせう。現在の社會だけの立場から、自然主義的の見方をすれば、それは全く當然の疑問です。けれども個人としても、社會としても、奉仕といふことを生活の原則と立てた以上は、この疑問を起す餘地がないはすになります。奉仕といへば、



社會も、個人も、總て最も必要とするところのものを提供し合ふべきはずですから、生活に必要なものは、誰でもが皆充たされなくてはなりません。自然社會に於て、充たされても猶ほ他人のものを掠取すると正反對に、文化社會に於ては、充たされなければ、なほ更自分を捧げます。従つて總ての人を充たすだけの資料が足りない場合には、總ての人が一樣に不足でがまんすることになるでせう。或る人だけが充たされ、或る人は充たされないなどいふ、不平等な病的現象の起る餘地はあるべきではありません。

個人と社會との人格關係だけで、抽象的にいふと、個人は金の取れる取れないに拘らず、せひとも職業によつて、社會に奉仕しなくてはなりません。社會は職業に關係なく、總ての社會員を平等に養はなくてはなりません。職業が社會人の生活の中軸であつて、到底怠つてはならないものであると同時に、各個人は社會の實質であつて、それを外にして、社會はないのであるから、社會は自己の保存

と進展との要件として、せひとも十分に各個人の生活を充たさなくてはならないわけです。もちろん事實上、社會と個人とを動的に見るとき、社會人としての個人の生活は、職業人としての貢献によつて、始めて具体化されるのであり、個人の組織体としての社會の發展は、職業人の能力によつて充實するのであるから、この意味に於て、社會に於ける職業と生活とは、常に相伴はなくてはならない結果を生じます。

現在はまだ半ば自然人であり、自然社會であつて、文化人、文化社會にまで進み切らないために、前述のやうな、人間らしい社會生活が不十分です。むしろ人間的要求とは正反對の目的で、多くの努力がなされて居ります。政治家は權勢欲のために、實業家は金儲けのために、其の他も總て自己のために、一般的の意義、總ての人の原則としてあてはまる意義を持たない、抽象的な自己一人の「私」のために、強制的に他人を犠牲にする傾向を多分に持つて居ります。社會生活に經驗



される、種々の不愉快不幸の醜惡現象は、總て結局この根本から起ると見るのが、昔から今に至つて、變ることのない批判でせう。

しかし從來のやうな間違つた非人間的社會生活を誰も是認しては居らず、満足して居ないことも事實なのであつて、ただ自然主義的精神と習慣とに引づられて、「これではいかぬ」と考へながら——中には無智なるがために、動物的個人主義、主我主義を至上原則と信ずる人もあるでせうが——同じ事を繰り返へしてゐるのが多數であらうと思はれます。もし果して不満足であり、而も既に不合理なことが明瞭である以上は、早速それを改めることに努力すべきでせう。不合理で不満足な生活に、貴い人格を汚してゐるのは、自己に對して、この上のない不忠實不眞面目な態度と言はなければなりません。

## 二六、天職と職業

從來の考へ方では、天職と職業とを別々に解してゐました。むしろ天職など、

は、一種宗教的の空想を詩的に表現したもので、現實に金を取る仕事の外に、何も一生の努力を捧げることがないやうに解してゐました。

私どもの生活を二元に分割するといふことは、既に言つたとほり、人格の要求に反するのであるから、その一方に統一するのは、形式上の一進歩です。ただ問題はその統一原理の内容です。いかに統一するかです。しかるに「金取り仕事」を意味する職業は、文化社會に於て許すことのできない見解ですから、この意味の職業によつて、人間の社會的勞働に意義づけることは出来ません。そこで一度天職といふ言葉を取り出して、その意味を吟味して見る必要を生じます。

天職とは「天」より與へられたものとして自覺された、その人獨特の仕事を意味します。従つてその責任は「天」に對するものであつて、社會に對するものでないやうに考へられます。そこに一つ職業といふことを、天職以外に分裂させた、理論的原因が存在します。



「天」とは何であるか。様々の解釋を入れることのできる漠然たる言葉ですが、前から言つて來た考へ方を基礎として解釋すれば、私どもの精神乃至人格の根源となつてゐるところの、至高の理想乃至生命を指すものといふことができるでせう。さうすると天職とは各個人がその個性を通して、精神乃至人格、即ち絶対の値うちを社會に實現するために、必然的な唯一の勞働方法として發見され、自覺された、最上の仕事でなくてはなりません。従つてその人の主觀からすると、それは自分勝手に擇んだ、偶然な便宜的の仕事でない、絶対の値うちが自身を實現するために、直接に特定の人を要求したのであて、その人はつまり「擇ばれた」のであり、道具に採用されたのであり、使命を荷はせられたのであり、而てその使命を果すための勞働が自分の天職であるといふ、自覺に立つことになるでせう。

このやうな仕事は、もとより「金」を相手にすべき性質のものではありませんから、こゝにも「金取り仕事」の意味の職業とは別物になる原因があることになりま

す。しかし前にも言つたやうに、奉仕を原則として、各自の最善を捧げて職業を行ふ社會に於ては、私どもの生活が相互的に、又全体的に支持されるわけですから、金取り仕事としての職業を、天職の外に持つ必要がないことになります。この點に於て、私どもの活動は高い統一を得ることになります。

眞に自分の天職を發見した人に於ては——文化人たる以上、なに人も發見すべきです——これが遂行に最善を盡し、全力を注ぐべきですから、その外に、それと別箇の仕事を併行させるやうな餘裕を、身にも心にも持たないはずでせう。もし持つといふ人があるなら、その人はまだ眞の天職を發見しない人か、さもなければ自己の天職に對して忠實でない人、即ち自己に對して眞面目でない人に相違ありません。この立場から、又私どもの生活は、主觀的に統一されて來なくてはならないことになるでせう。

かくて總ての人がおの／＼その天職に全力を捧げて、奉仕の生活を營み、それ



を要素内容として社會が組織され、進展してゆくことゝなつて、そこに始めて文化社會が見られます。而てかくの如き文化社會こそ、眞に人間の住むべき、又私どもにとつて望ましい社會ではないのでせうか。従つてかくあらせるやうに、めいゝ努力奮闘すべきではないでせうか。

### 二七、「金」と物の値うち

金を取る手段としてばかり職業を取扱ふことになつた原因に就いて考へることは、今暫くよしておいて、ただ「金を取る」とは何の意味であるか、金はいかに取扱ふべきものであるかは、現實の經濟生活の要件であるから、こゝに必要と思はれる範圍だけに於て、一應考へて見ませう。

「金」はなぜ必要なのか。金貨を喰ふわけにゆかず、紙幣を着るわけにゆかず、銀貨や銅貨で家屋を建築するわけにもゆかず、結局貨幣の實質そのものは、私どもに大した用のあるものでない。用の生ずるのはその實質にあるのでなくして、

形式にあります。貨幣が代表してゐる値うち——それによつて、いつでも任意に、私どもの生活資料が得られるといふ、信用にあることになります。もつと手近い言ひ方にすれば、必要なのは金でなくて、金が持つて來てくれる生活資料が必要なのです。

ところで、その生活資料とは何であるか。いふまでなく、人間の生命を維持發展するために用ゐられる、種々の物質材料であると、普通にはいふでせう。しかしこれとても、直接にその材料そのものが目的なのだといへません。なぜなら、もし假りに材料そのものが直接目的になるものとしたなら、ご飯を澤山たべればたべるほど肥えるはずであり、衣服を澤山着れば着るほど健康になるはずであるが、事實さうはゆかないでせう。して見ると、單に材料そのものが、善いのではなくて、材料の用ゐる方、即ち形式の力が加はらなければならぬことになります。つまり單純な物質そのものではないのです。而てその用ゐる方とは、適度の用ゐる方



を意味します。更にいへば「適度」といふことが大切なことになります。「適度」といふことは、物質なくして意味をなしません、しかし明かに物質をはなれた形式です。

更に又一步を進めて、「適度」といふことを考へて見ます。ただ物質材料がそこにあるだけでは、われわれの生活の役に立たないのであつて、その物質を生かす働き、材料の値うちを生命の力として發揮する働きが働かなくてはならない。而てその働きの現はれる形式的要件か適度とか調和とか、呼ばれる状態なのです。適度調和は種々の要件の關係であつて、その關係が都合よく成立つてゐること、即ち目的乃至理想によつて統一されてゐることを意味しますから、つまり一つの理想がそこに實現されてゐる状態に外なりません。

さうして見ると、生活資料たる物質の貴いのは、即ち私どもに對して値うちのあるのは、その上に私どもの理想が實現され、目的に對しての手段たる關係を十分に具体的にし得た場合であつて、資料そのものが直ちに貴いのではないといふことが明かなわけです。「猫に小判」といふ諺は、この意味を極めて簡明に表はした言葉でせう。

## 二八、物の値うちと抽象生活者

事實に就て觀察しても、私どもの生活は、無數の要件の關係の上に成立ち、その關係の調和統一の動きが、私ども眼前の具体的な生活として現はれてゐるので、ですからどんな要件でも、この關係組織の中に入りこみ、目的によつて統一されない限り、何の値うちをも現すことができませぬ。いかに貴重な滋養品であれ、藥品であれ、ただ滋養になるものだといふ名前だけに囚はれて、自分の體質も、その時の心理的生理的狀態も、更にその外の生活諸要素、土地や氣候のことも考へずに、いきなり口の中に押しこんだところで、決してそれだけの効果を生ずるものでなく、よし生じてもそれは偶然であるから、それに信賴するわけにゆ



かないのみか、却つて害をなすことすら折々あります。これは物の値うちそのものは絶対なものでも、その具体的な實現は、ただ相對關係の上にはかり見られるものであるといふことを忘れて、關係の上に現はれる物の値うちが、その關係に拘りなく個々の物そのものにあると思つてゐるやり方です。このやうな生活を名けて、抽象的の生活といふべきでせう。或は無内容の生活と言つてもいいでせう。

理論を取ふことを抽象的だ、無内容の生活だと輕蔑するやうな人も世間にはありますけれども、總て研究や思索などいふ仕事の方法は、本來或る意味に於て抽象でなくては行はれないのであり、而てこれは結局一層高い具体化、一層高い統一を求める過程にすぎないので。理論をただ獨立の理論として、その玩弄に耽つてゐるやうな抽象家もあるかも知れませんが、理論の目的は決して抽象的なものでありません。むしろ統一、乃至具体化を實現する過程であるところの實行に際して、前述のやうに、他との關係を引離して、個々の物そのものに執着するも

のこそ、眞の抽象家、無内容の生活者なのです。

この理由からして、その意味關係から引離し、そのものだけでは何の値うちもない、値うちのしるし乃至代表にすぎない金銭財産を、ただひたすらにありがたいものとして、その蓄積のために一生を用ゐ終るやうな人、社會人類全般との關係組織を無視し、孤獨の立場を取つた一個人の慾望のために、飽くまで物質を私有し、獨占しようとするやうな人などほど、抽象生活者、無内容の形式生活者はないと言つていいでせう。これ等の人達は、寶の山に入りながら、寶を持たずに、素手で歸る人、むしろ寶の山を懷に抱きながら、寶を知らずに一生を終る人です。世にもかわいさうな人たちです。

職業を單に金取り仕事と考へるのは、つまりこのやうな無内容の抽象生活者、社會に住みながら、社會生活を知らない人、しない人、社會を自己個人の方便、道具、機械、物質と考へてゐる人、自己の人格を社會文化によつて充實し、又社



會文化の上に實現して、具體的の人生を生きない人、即ち人格を持たない人に外ならないのです。

この人は物の値うちを殺す人、常に適度調和を破る人ですから、このやうな人が社會にあればあるほど、その社會は分裂し、衝突抗爭が起り、不安混亂の中に停滯衰廢しなければなりません。

## 二九、自然の人格化と經濟生活

私どもの生活資料はどこから與へられるかといふと、もちろん總て自然から與へられます。自然はその一切の物を、一切の人に平等に與へて居ります。日光、空氣、水、その他各種の動植礦物にしても、その或る物を、或る人に限つて、特別に與へるといふやうなことをしては居りません。

自然から與へられる物を生活資料とするとは、どんな手續きをとることかといへば、つまりだんくんに加工して、遂に人格的生命化するに外なりません。その

加工の程度や様式は無限であつて、その物により、目的によつて、皆各それ／＼ちがひますものゝ、とにかく私どもから縁の遠い、無關係な自然物を、だんくんに變質變形させて、遂に人格の力の内容にまで引きよせ、かくてその物の値うちを十分に發現させることに於ては一つです。で、それを更に簡單に言へば、自然の人格化といふことに綜括されます。

たとへば、もと天然に發生した稻に改良を加へて、今日のやうな美味豊産な種類とし、それに播種、手入れ、肥料等の人工を加へて、米を收穫し、米を搗き白げ、御飯にたき、更に口に入れて噛みくだき、消化器内で消化作用を行つて、それを變質し、血管内に吸収して、各細胞に分配し、細胞内で更に變質して、熱を發生させ、他の材料から來る要素と協同して、私どもの生命を働かせ、精神人格の持續發展の仕事させることに終るやうなものです。衣に關しても、住に關しても、その自然物の人格化の形式は違つても、原則に於ては同じことです。



これはその外形からすると、外から内に物をとりこむ一方のやうに見えますが、しかしただ機械的に袋の中に物を押しこむのとはちがつて、そのとりこむ過程は即ち目的の到達、理想の實現に外ならぬのであり、つまり人格の値うちを發揮するのであり、而して物に變化を與へつゝ、各要件の關係組織の中に編みこみ、人格の統一の下に置いて、その内容とし終るところに、値うちが發揮されるのですから、とりこむと同時に、それはまた一面直ちに、自我を持ち出してゆくことにもなるわけです。私どもの生活、少くも生活の物質的側面は、この人格化の働きに外なりません。

この一とつゞきの、自然を人格化する過程の中で、比較的に外部にある、われわれの肉體の直接作用にまで來る部分を經濟生活とし、更にそれが生産と消費とに分けられて居りますが、前述のことから見れば、生産も實は消費の一部分なのであつて、人格化の過程の中の、最も外部的な、即ち最も自然に接近した、從つ

て人格化の最も粗大なるところに、便宜上特に生産と名けたまふのです。もし消費が資料の人格化を意味するならば、私どもの經濟活動は消費の外にありません。

### 三〇、生産と消費

生産といふ名前は、人格に遠いために、人格化の粗大なためにつけられたのは、もちろんありません。自然物に人工を加へて變形變質した結果は、人間の理想の實現であつて、本來人間とは無關係に存在した、自然物そのまゝとは異つたもの、即ち特に人間生活の目的に適合するやうな性質を帯びた、一種のものが出來あがりますから、そこに外形上特に生産と呼ばれる意味を生じます。同じく外形上からすると、私どもはその生産を個人々々の直接資料として用ゐつくしてしまふのでありますから、そこに建設ではなくて破壊、生産に對して消費の意味を生じます。又生産は經濟生活上の社會的過程、消費はその個人的過程と區別されるやうな特質も一部には存しますから、社會的見地からも、生産と消費との區別



のできないことはありません。

しかしとにかく生活の内面的意義からすると、自然物質の人格化の意味に於て、自然物質をそのままに置かずに、人工を加へて破壊してしまふ意味に於て、經濟生活は總て一ついきの消費であり、又自然の上に理想を實現して、新たに値うちを作り出す意味に於て、その終極は私どもの生命の成長發展を結果する意味に於て、總て一とついきの生産です。つまり一つのことを、方法の上から、材料の上から見れば、總て消費、目的の上から、意義の上から見れば、總て生産といふことになります。而て外形上生産と消費と分けて見た場合には、消費が目的であつて、生産はその手段であるといふ關係になることは、申すまでもありません。商業といふのは、物資の集散、即ち大体生産と消費との關係を都合よくする手続きであり、貨幣はその仕事の道具と言つてもいゝでせう。

經濟産業の發達した今日に於ては、その組織關係は大へん複雑になつて居りま

すし、又従つて經濟専門の理論からするならば、種々めんごうな問題もあるでせう。けれども私どもの生活の内面的意義、道德的文化的原則から見れば、私どもの經濟生活は、前述のやうに簡單なものです。また生活的要求の本旨に照らして、實行の上では、そんなに複雑であるべき理由はない筈です。

要するに、私どもの生活の具体化、つまり生活は、自然物質を離れて成立たないものであるから、自然物質は缺くべからざる要件に相違ないのです。ただそれは自然の人格化、物の上に於ける理想の實現によつて、私どもの生命の發展、値うちの創造に究極するのであるから、つまり物質は奉仕生活の資料たるに過ぎません。「金もうけ」のために産業が行はれるといふやうな餘地は、その間のごにもないのです。もしあつたら、直ちにそれは不正不合理の現象と見なしてさしかへがないでせう。

事實上「金をもうける」といふことの手續きは、本來人類全体への賜與物たる自



然物資を、個人で独占するか、乃至は他人の生活資料となるべき部分を削減して、自分の資料を増加するかの方針に本づく努力の外にありません。而もこれは明かに不正不合理なことです。結極人類相互に噛み合ひ、殺し合ふ動物的鬭争世界、佛教でいふ修羅餓鬼畜生の世界の建設を目標とする生活方針であつて、人間社會の原則と正反對の方向を取るのでありますから、文化の精神からは、絶対に排斥しなくてはなりません。

### 三一、浪費

私どもの生活に於て、外形から見ても、内面から見ても必ず生産でなくてはなりません。さもなければ、消費の目的に外れ、又生活の目的に外れるのです。精神的人格的意義に於て、個人的と同時に社會的に、生産、創造、成長、發展の結果を來たさない消費があるなら、それは空虚な消費、無建設の破壊、文字の表面意義通りの單なる消費、即ち浪費であつて、自然に對しても、他人に

對しても、許すことのできない犯罪です。

浪費に屬する消費は、一厘一毫に値ひする物でも許してはなりません。浪費は不道德のしるしです。破壊者の看板です。

浪費とは、ただ外部から取り入れる物質に關してばかり考へられることではない。時間や場處に於て、心身の能力に於て、特に最も然りです。心身の能力でも、自分のものであるから、自分の勝手に浪費しても差支へがないと思ふなら、それは大きなまちがひであることを、更にくり返して説明する必要はないでせう。それは人類に捧げらるべきもの、人類を通して、理想に、神に捧げらるべきもの、人格の値うちを發揮するための、最も貴重な道具であり、資料であるのですから、それを無意義に使用するやうなことは、不徳の最上と評すべきです。

或は又餘分に過量にあるものだつたら、それを棄てようと、ごうしようを勝手ではないかと言ふ人があるなら、私は反問しませう。一体餘分とは何のことです



かど。総合的關係的に見た自然物に、餘分といふものがあるでせうか。又捧げるものに、餘分といふことのあるはずがないではありませんか。理想實現の過程が無限である以上、その過程を運ぶ資料も無限になくはならないでせう。自他共に總てがとり用ゐて、人格としての値うちを充實する生活資料に、餘りのできるはずはありません。もし一部分に餘りを生ずるなら、それはどこかに不足なところ、生活過程の停滞止息するところ、又は關係を無視した、分割された抽象の固定があるに相違ありません。

現在の實狀から見ても、從來の習慣的見解に従つて、いはゆる財産に餘裕のある人と、ない人とを比較するならば、有り餘るといふ人は、恐らくごく少數であつて、大多數は窮乏に苦む人です。餘るといふものゝ、その「餘り」は、たしかに社會の一部だけを分割抽象した上の虚偽であることを、精しく説明するまでもありません。虚偽とは必ずしも個人的罪惡のみを意味するのではない、人類の生活

關係のごとくに、虚偽を許す間隙があるのです。私どもはその間隙のごとにあるかを突きとめて、それを矯正充實し、人間としての正當な生活世界を、社會のすみぐまで徹底して打建てなくてはなりません。「各その志を遂げしめる」やうに、總ての人がその理想實現の自由を確實に保有し得るやうに努力するのは、社會的奉仕の最も重大な、緊急な要點であらうと思はれます。

以上は、生活の方法から見ての浪費ですが、私どもは更に材料そのものに對する態度の上から、極めて重大な浪費の問題を考へて見なくてはなりません。

人間は自然物を勝手に使用し、殊に人情の忍び得ないやうな慘虐な方法で、他の生物——高等動物までも、殺した上に、皮を剥ぎ、肉を刻み、煮たり、焼いたり、食べたり、着たりしてゐますが、一体人間に何の資格があつて、この慘虐を敢てする権利が許されるのでせうか。

弱者の肉が強者の食となることを常態とする、現實の生物界の生活法を、人格



としての人間の生活に持ちこむことはもとよりできません。「人間が文化の生産といふ立派な仕事をしてゐるから」とすると、どんな人間のどれだけか、果して眞の文化のために奉仕してゐるかと問はれるでせう。文化的生活と言つても、もし自然を除外しての言ひ分なら、まだ人間の勝手です。これは人類對自然の問題ですから、人間社會内だけの理由では、解決をつけることができません。どうしても人間界を超越した、宇宙的の原則を求めなくてはなりません。

それで前々からの考へ方をこゝにあてはめ、途中の説明を省いて、手早く結論を提出しますと、人間、或は自分、或は現實の事はか頭にない人間が、人間の名のゆゑに、又は自分のために、他の生物、自然物を取つて食つたり、着たりする權利は、全然持たないはずです。ただ人格生活に於て一向精進して、宇宙の文化意志への奉仕の赤誠を盡すものにのみ、その捧げ物の材料として、許されます。現實生活だけの、自然生物的の人間が、意識しつゝ、自然物を勝手に食べたり、着たり

りするのは、絶對の浪費、どんなに節約しても間に合はない、本質的の浪費です。

この重大な宇宙經濟の意義に就いて私どもは更に深く思慮するところがなくてはなりません。

### 三二、二つの類廢生活と眞の労働

理想實現の努力はつまり労働に外ならないのであるが、更に狭くいへば、一つの職業を擇んで、社會奉仕の努力を社會に具体化するといふ總ての人の義務は、労働によつてのみ盡されます。普通にいふ「労働」は、その中でも、筋力を主として物質的生産事業に従事し、同時にその生産とは全く別に、労働そのものが商品として取扱はれるやうな場合のみを指して言つてゐますが、しかし人間の要求を充たすための仕事は、筋力による物質的生産のみでなく、又労働は金に換算すべき性質のものではなく、人格を具体化して、その内容を充實しゆく努力なのであるから、労働といふ名前を、現在のやうに狭く、外形的に、部分的に、手段的に



用ゐるのは妥當でありませぬ。

世間の人が労働を賤む習慣を作つたのも、労働といふことを、人格的意義のない、機械的物質的なものに限つてしまつて、その外に労働はないやうに考へたからであつて、このやうな労働はただその努力の苦痛の代償として、生活資料が得られる——それも現在に於ては極めて不十分にしか得られない——ほか、何もものもないのであるから、賤しむ以上に嫌み忌つて、出来れば労働なしの獲得をしたいと思ひ、結局その外形はごうであつても、その實質精神に於て、賭博か、乞食か、盗賊かの、いづれかの道を、又は三者を合せ擇ぶことになるのが當然なことです。

更にまた同様の見地から、生活は「虚偽の勞苦」と、「官能的享樂」とに二分され、貴い生命はただこの二つの機械と自然とのために浪費されてしまふといふ、最も排斥すべき叛逆的頹廢生活が現はれて來ます。そこには人格的生命の芽が全く萎

縮してしまつてゐます。實に慘ましい人生の破産と言はなければなりません。

人格的自由の精神の全然無視された、機械主義の労働を輕蔑し、嫌忌し、自由が具体的に味識される感じのする享樂を尊重し、好愛するのは、人性の要求からまことに當然のことであるが、唯その理解がまちがつて居るのです。そんな無意味な労働の外に労働といふものがなく、従つて労働といふものは本來値うちのなにものだとする理解は誤りです。値うちを感情として味識する享樂は、人性の根本的要求の一發動ですけれども、官能的、または感覺的刺戟にのみ待つべき、低劣淺小なものゝ外にないやうに思つて、それに耽溺するところに、人間性の十分な發露と味識とのあるやうに思ふのは誤りです。この機械主義と動物主義とは、人間性の要求と正反對の方向をとるところの、墮落的な生活であるから、共に極力排斥しなくてはなりません。

眞の労働は眞の享樂と共に、人生の内容そのものを充實する要素であるから、



これは生きてゐるかぎり、一日も忘れてはならないものです。而て享樂は享樂として、生活の一分化をなすものであるが、同時に又各分化の中に、それ／＼互ひに内含さるべきものであるから、今問題にしてゐる労働を主としていへば、労働の中に享樂の要素が内含されてゐなくてはなりません。更に約言すれば、労働がそのまま直ちに享樂でなくてはなりません。さもなければ、人生の眞内容となる労働の旨意が失はれるのです。何となれば、労働とは理想の實現、生活の統一を具体化する過程であり、而てそれは自由の發揮乃至獲得であつて、その自由——生命の自由、更に生命そのものの味識が享樂であるからです。

### 三三、職業と家事

かくの如き労働を内容として、自己を具体的に社會に實現する、即ち貢獻する職業(廣義)は、なに人にも離るべからざるものであることが明かです。職業によつて社會に労働しない人は、恥つべき賤人であることが明かです。従つて又なに

人も眞正の意味の職業を持たないといふことのないやうにすると同時に、眞正の意味の職業乃至労働が自由に、十分に出来るやうに、境遇の整理と、社會の組織とに力めることは、私どもの政治的要件でなくてはなりません。

かういふと、家庭の雜務に没頭しなければならぬやうな位置に据ゑつけられてゐる、現在の多數の女性にあてはまらない見方ではないのかといふ詰問が、或は出るでせう。けれどもあてはまらないのは、ただ現在の女性ばかりでありません。現在の社會的境遇に於ては、男性にでも、しつくりとはあてはまりません。それは人間としての自覺を持つた男性が、どれだけその生活の目的と手段との矛盾に苦しんでゐるかを見てわかるでせう。社會的「改造」の要求、乃至運動の起る、重大な出發點の一つがそこにあります。

けれども前述でわかるとほり、私どもの必ず就くべき職業は、現實の社會的外形で機械的に定められたものではなくて、理想の内面的意義によつて、必然に定



められるもの、つまりいふところの天職なのでありますから、その人の考へ方、或は仕事の態度動機目的如何によつて、外形がどうであらうと、それに拘はらずに、或る程度まで、なに人のいかなる仕事をも、天職とすることができるとです。従来家庭と社會との間に著しい差別をつけてゐた考へ方を改めて、家庭にもつと社會的要素を加へる必要があることを、前にも申しましたが、同様の立場から、家庭内に於ける各個人の役目の考へ方に、従来よりも一層社會を相手とする意味を加へる必要があります。

衣、食、住、育兒、衛生、その他に於ても、總て家庭内で終始完結するといふ生活要素は、今日では殆どないのでありますから、そこに社會への直接奉仕の道は、いくらかも開けて居ります。

たとへば育兒にしましても、子どもは自分のものであるから、自分の満足できる限り、どんな育てやうをしてもいふ考へ方は、全く人間的社會的の考へ

方でありません。たとひ子供は親の子、親の分身であつても、一個獨立の人格として、親の所有物であり得ないものでありますし、親と等しく、無限の生命にその生誕の源を持つて居り、絶對の理想の直接の顯現たる意味に於ても、決して親の私情私心の相手、或は材料とすべきではありません。又人類全体はその人格的進展、即ち後繼者として、あらゆる子どもに要求を持つわけですし、國家社會はその人格内容、即ち組成員として、一人々々の子どもに要求を特つて居ります。従つて親は天地、人類、社會から子どもを委託されて、養育の任務を負うたものと見なす外はありません。この意味に於て、育兒の仕事は、社會に對して重大な責任を持つた、高貴な、嚴肅な奉仕的の職業です。かういふ見方は、自然主義者からすると、骨ばつた、情味のないものに思はれるでせう。しかし人間としての自覺と要求とに生きようとする人は、親を莊嚴する光が、このやうな道德的背景を持つた人情の中から輝いて來ることを承認するでせう。その外の家事萬端も、推



して考へることができたらうと思はれます。

#### 三四、社會人の資格と責務

今一つ、仕事の場處が家庭の内にあると、外にあるとによつて、職業か否かをわけるのは、もとより無意義です。外形上又相手とするものが家庭か、社會かによつてわけるとすると、理論的に、社會とはどの範圍まで含まれるか、事實の上から、現在の職業者と呼ばれる各個人の直接相手としてゐるものは、果して社會そのものかといふ問題が起つて、結局これも曖昧になります。

それで職業と労働とを、金を取る手段といふ、商業主義見地の外に置いて考へるとき、どうしても外形的に説明することが困難になるわけであつて、なに人も社會人たる限り、必ず常に携はるべきものといふ根據を與へることができなくなり、そこで努力の目的乃至動機が、「社會に對する義務、責任、貢献、奉仕にある一定の仕事」といふ、内面的、道德的見地を取らなければならなくなるのです。

この見地からすると、なに人も、いかなる形式に於ても、常に職業を持ち、労働をすることが出来るわけであつて、こゝに社會人としての資格を持つことにならざるでせう。前にも言つたやうに、生命ある社會は、労働を内容とする各社會員の職業を組織して各種機關を造り、それを統一して、一つの大きな値うち——全社會員の目的——を實現創造してゆくところの、活動体でなければならぬのでありますから、いかなる人の活動努力をも、決して散逸浪費させないやうに、せひともそれを職業化させて、社會の組織機關の維持運用を結果させなくてはなりません。而てそのためには、從來の商賣的職業觀をすつかり改めてかゝらなくてはならなくなります。

商賣的職業觀を改めるとは、いふまでもなく職業と労働とを、全く金儲けのため的手段とばかり考へる、或は職業と労働との目的を金に置くといふ考へ方を改める意味であつて、經濟といふことゝ全く無關係にする意味ではありません。職



業は私どもの生活に必要な、あらゆる要素の生産乃至消費に關係する外にないの  
でありますから、經濟が私どもの生活の一方面であるかぎり、職業がそれと結合  
しない理由はないわけです。

更にまた職業は社會の現實を離れては、空虚な抽象になるのでありますから、  
改善的態度をとりつゝ、同時に現實の社會の要求に適合するやう、種類や形式が  
定められなくてはなりません、しかし私どもの生活努力の最後の目標は社會の  
現實的外形にあるのでなくして、その理想的內容、即ち絶對の人類理想、即ち  
至善の値うちにあるのであり、現實の社會的要求も、その根柢は同様であるべき  
はずですから、結局私どもの職業の肝心とするところは、至善の實現といふこと  
に歸着しなくてはなりません。社會的方式によつての至善の理想に對する、全的  
永久的の努力こそ、人類の要求する値うちの創造的の内容となるものであつて、そ  
れが、社會の要求する、又個人の満足する最後のものであるはずです。

人格としての人間の安住する世界は、外形的現實の社會ではなくして、内面的  
意義の世界であるのでありますから、従つて私どもの社會は、この内面的意義の  
表現、即ち理想、或は値うちの具体化された組織活動でなければなりません。即  
ち自然社會ではなくて、文化社會でなくてはなりません。

この文化社會の建設、これが社會人としての私どもの責務なのです。

### 三五、労働と修養、職業の貴賤

職業を、前述のやうに、高貴な責務と解釋するとき、之がための労働は、  
同時に最も具体的な向上精進、即ち品性の修養とならなくてはなりません。人格  
を社會的に實現する方式としての職業に勵精する限り、それほど有力な社會的の  
修養法はないはず。修養と仕事とが別々な努力となるのは、既に重大な人格  
活動の分裂であつて、「二兎を追ふものは一兎を得ず」といふ格言が、最も著しい  
證據を示すべき場合です。私どもの人格の要件が統一といふことに存するならば、



修養は同時に生産的の仕事となり、仕事は同時に、精神修養の具体的努力となる。むしろ修養は直ちに内面的意義に於ての仕事であり、仕事は直に具体的努力としての修養でなくてはなりません。仕事と修養とが、一体の兩側面であるといふ實質を持たない職業は、偽りであるを見るべきです。その仕事は、機械であり、その修養は抽象であるとするべきです。

しかし人格的自覺に基いて擇ばれるかぎり、職業に偽りといふことはないはずですから、精しくいへば、職業に力める態度に偽りがあることになるでせう。更にその人の精神に偽りがある——その人に偽りがあることになるでせう。このやうな偽りの人は、必要にして、且つ正當な職業に、強いて貴賤の階級をつけたがります。而て貴いと誤判した仕事をしてゐるもの、仕事をするといふよりも、むしろその地位に就いたといふ名前だけで威張ります。賤しいと誤判した仕事に就いてゐるといふ名前だけで萎れます。

習俗的な自然主義の世間で、低い職業と評價する仕事をしてゐるものが、その無智な世間の誤謬に雷同阿附して、「おれも一生水呑百姓で終るのか」とか「私はこの年になるまで教員です。お恥かしい次第です」とか言つて、自分自身を嘲笑するのをきくと、仕事を解せず、自分自身を知らず、生活に勵精しない、その人の無智と懶惰とが、氣の毒になるばかりです。

もし職業に貴賤があるとすれば、客觀的には必要にして正當な職業が貴いのであり、不必要にして不正當な職業が賤しいのです。主觀的には職業を功利的手段と見做し、且つ低級なものと見做す態度が、その職業を賤しいものにするのであり、それに反する場合には同じ職業をも貴いものにするのです。私は反問いたします。世間がもし必要にして正當な職業をも輕蔑するならば、何ゆゑその職業の効果を徹底させることに依つて、その職業を通して、高貴な人格を實現することによつて、世間の暗愚を警醒し、その職業の位地を高めないのでか。自分を社



會的に生かしてくれた、恩義ある職業のために、何ゆゑ冤を雪ぐ骨折りをしないのですか。もしどうしてもいけない職業なら、何ゆゑそれを離れないで、自分を辱かしてゐるのですか。

職業を人格生活の目的から分離して、單純な功利的手段とし、而も卑賤にして且つ苦痛なものとする誤謬不合理を矯正し、職業團としての社會を、同時に修養團として、更に享樂(生の美的鑑賞)團として、綜合一体の人格的活動團たらしめる努力は、社會のためにも、個人のためにも根本的急務です。而てその端緒は、職業的勞働の内面に人格實現の意義を充實させるといふ、一系統の努力に存します。

### 三六、社交、社會的儀禮

職業は社會の動的組織要素として、全体及び相互の必要關係の上に成立つた、意力的の要件、言はゞ社會の筋骨をなすものですが、その血肉となつて、情味の方面から、社會の融合調和を結果するものに「社交」といふことがあります。社交

は必要關係の上に立つものでなくて、自由關係、好意關係の上に立つもの、せむともなくてはならない、生存の基礎要件とは言へませんが、社會感情の満足によつて、社會生活そのもの、内容を味識體驗させ、社會の統一を、個人的隨意的の享樂の中に成就する作用でありますから、この意味に於て、むしろ積極的な社會生活の要件とも言へるでせう。

こゝで社交といふのは、國家的の儀禮、個人間の交際、その他、共感同情に基いた、社會的行動交渉の、廣狹一切を含めてゐるのですが、定められた公共的の儀禮と、隨意的な個人間の交際との間には、内容的情味に於て、多大の相違があります。

國祭日、國際記念日、その他の公共的弔賀に關する儀禮は、規律的形式的な中に、同一の目的に對し、同一の感情を共に湧かすために一種の大きな悦びがあり、その關係する社會全体の共通意識を強める上に、大きな効果があります。その代



り、内容の空虚冷淡なものになり易く、單に旗を揚げる日と考へたり、遊樂の日と考へたりするやうになりますと、全然その意味を失ふことになりますから、全社會員に對して意義の薄弱な、ただ習慣的形式だけ残つてゐるやうな儀禮をば廢して、民衆的に意義のある、主要の儀禮に就いては、十分にその目的の徹底するやう、取行はなくてはなりません。總て意義が切實でなく、感情の冷淡な儀式の形だけを強いることは、儀禮の本旨からも、民衆その人の生活からも、亦その社會の希望からも、却つて有害な結果を生じます。

家庭にも弔賀に關する習慣的儀禮があります。その態度用意に於ても、社會公共のそれと同じことですが、これはまた單なる習慣や、世間體や、虚榮や、更に又不純な功利心などから、無意義な浪費をする弊害も少くないやうです。家庭内のことは、家庭での合理的な見解に従つて行ふべきで、世間體や、舊い習慣に、形式だけ従ふ必要はありません。總ての進歩は内面化、精神化の方向をとるのです。

から、家庭内の儀禮でも、その方向をとつて、だん／＼改善されるべきです。

科學的知識と功利的見解とから、反對に全然儀禮の値うちを認めない人もあつて、それ等の一切を無智の迷信か、または空虚な形式かに過ぎないと排斥します。或は又生活を改造して、新しい意義を充實しようとする理想家は、舊い習慣が現在に適しない理由から儀禮を廢絶させる場合もあります。固定した迷信の弊もたしかに多いのですけれども、それ等の根柢には、やがて人格の永遠性、生命の實在にまで醇化される思想があつて、機械的斷片の偶然的現實に満足せず、時間的、空間的に永遠普遍の一全体を生活に實現しようとする要求の働きが見られるのですから、それは遂に絶對的理想、値うちの創造となり、最も深刻な生活の力となつて、再び現實に還つて來る可能性があります。従つて迷信と言つても、強いてその根柢から打ちこわすべきでなく、改造醇化を試るべきです。

形式、習俗といふにも、不合理なものが多く、それに功利や虚榮も手傳つて、



浪費を強いてゐますが、やはり社會性の發動は存するのであるから、これも合理的なものに改造させる可能性はあるでせう。理想的意義を生活に充實させるためには、舊い習慣の桎梏を破壊しようとするのは、貴重な青年理想の發動であつて、この一本調子な若い衝動を缺けば、社會は死んでしまひます。ただ舊い習慣の意味を考へ、その由て來るところを尋ねて、根原に遡り、人格の要求に基いた、一般的の原理を發見して、その實現としての改造を行ふのでなくては、單なる破壊に終つて、人生的の値うちを作り出すことができません。それでは徒勞ですから、舊習の破壊も、一時の客氣からでなく、根柢のある、眞劍な態度用意を以て取りかゝることが必要です。

### 三七、個人的の交際と贈物

個人間の自由な交際には、もとより依らなくてはならない一定の規矩といふものがないわけであるが、ただ人と人との關係生活を整頓して、各人の自由を發揮

させ、眞性を發露させるための作法は、いかなる場合にも存すべきはずであるから、その意味の原則だけは、せひとも守られなくてはなりません。

關係には親疎遠近、いろいろありますから、作法のあらはれる形もいろいろになるでせう。一般の習慣として固定した形式によらなくてはならない場合もあるし、殆ど態度精神だけで、表面の形式を要しない場合もあるでせう。ただ作法と、それを裏づける精神とは、いかなる場合にも缺くべからざるものであることを忘れてはなりません。作法が形にあらはれる場合は、その裏面に十分な心持が充實してゐるべきであり、心情だけが表面に流露してゐるやうな場合には、作法の原則は、十分裏面に守られなくてはなりません。ところが、實際はいづれか一方の表面だけになつてしまつて、二つの綜合を缺く生活になりがちです。

表面に厳格な、又はていねいな作法の守られる場合には、裏面の心情が欠乏して居り、表面に心情の流露する、自由の十分な交際の場合には、作法の心得が忘



れられてしまふといふやうな、深みのない、不たしかな生活は、いづれも人格の眞實性を失つたものであり、社會生活の組織と發達とを害するものであるから、私どもの生活の中にそれを取り入れてはなりません。

私どもの國で、個人的、或は家庭的交際上問題となるのは贈物と飲食とであるやうです。つまり贈物と飲食とが、やだらに用ゐられ過ぎるといふのです。

やだらにするのは何でもよろしくありません。贈物はつまり捧げ物——供物である筈ですから、相手は同等の人間であつても、人を通して神への心持ちで、最も敬虔な用意を持つべきです。奉獻する物の最大なものは、自分に於て最も貴い物、即ち自我、生命、精神、魂の外にないですから、平生全力をあげて奉仕の生活をしてゐるものには、別に贈物をする餘地がないわけせう。たゞ奉仕の形式、捧げる資料は、時と場合とによつて、いろいろになるのですから、世間でいふ贈物の形でされることもまたある筈です。この場合に、捧げる物は紙一枚の瑣細な

ものでも、それはたゞ表面のしるしであつて、それに代表される内容は、常に全我的精神でなくてはなりません。然らざる限りは、たとひ億萬の財寶を積むとも、それは偽りの贈物であつて、人格を侮辱するに終ります。

人格を棄てたものは、返報を豫期し、利益の打算をして贈物します。精神の空虚なものは、てれかくしのために、虚飾のために、贈物をします。判断力を缺くものは、人の慾情に媚び、自分の優越感を満足せざるために、贈物をします。これ等は皆偽りの贈物の類です。贈つても贈られても、心あるものが不愉快を感じるやうな贈物、言ひかへると、心の束縛を感じるやうな贈物をしてなりませんし、受けてもなりません。

理由や、物品や、形式やは何であれ、そこに心からの悦びがわき、心からの感謝がこもり、双方の眞情と眞情とがそれよつて發露、綜合、具体化され、一つに燃えあがる生命の發動を體驗されるやうな贈物、それによつて、心の自由が享樂



されるやうな贈物は、多くあるほどよろしいです。また表面に現れた物品などはなくても、氣にしてはなりません。物あるによつて心は徹底しますが、物に拘泥すると、心は却つて消えてしまひます。

### 三八、交際のための食事

飲食は人生にとつて、最も貴重な生活です。たゞに實用的に見て缺くべからざるものであるがためでない、飲食そのことが、直ちに生の發動そのもの、享樂で、殊に多くの人がそれを共にすることは、官能の活動を通して、共感同情の喜びを徹底するのであるから、人間交際の最も具体的な機關といふべきでせう。それだけまた最も嚴肅に、敬虔にとり扱ひ、決してかりそめにしてはなりません。生活の改善に心がける人だちの類に氣にするやうに、てれかくしのための、心にもないお土産の多いのに對して、てれかくしのための、心にもない御馳走が、實際多すぎるでせう。いかに事務用の訪問だからとて、かわいた咽喉をうるほす

べき番茶一杯も出さないのも、あまり冷たいものですが、さりとして人の顔さへ見ると、すぐさまご馳走をならべるのも、あまりに無考へです。殊に子どもを見ると、菓子と與へることにきめておくやうなことは、子どもの愛らしさに、一層喜ばせたい同情から、われ知らず與へるやうな、動機の眞情を探るべき場合もありますが、その親に媚びるために、子どもを傷けても顧みないといふ、賤むべき、憎むべき動機に出ることもあつて、食事の精神が全く汚されます。

クリストが最後の晩餐のときに、葡萄酒をついて「これはわが血である」またパンを割いては「これはわが肉である」と言つて、弟子たちにわけたといふことがありますが、これは決して比喩的の修辭でないと私は信じて居ります。食物はどこから來て、どんな効果を私どもに與へて居るでせうか。食物が私どもの口中に運ばれるまでには、幾多の人の血と汗と加はつて居ります。而も食物となる資料の生命は、人間が自由に作り出し得るものではなくて、遠く宇宙の生命に淵源して



居るとほか考へられません。即ち食物には、その淵源に於て、その培養加工に於て、貴い値うちが負荷されてゐます。食物が私どもの養ひとなるのは、つまりこの値うちが私どもの肉体を通して實現されるのです、ですから、食事は人の血肉を食ふもの、宇宙の生命を食ふもの、而て更に之を値うちとしての生命に化するものと言つて、差支へがないでせう。

食物が負荷してゐる絶對の値うちを、私どもの肉体を通して實現させるには、それに適當な食べ方をしなくてはなりません。人格生活の本旨に従へば、食物の培養、採收、加工は、すべて神聖な捧げものとしてなされるはずですから、とりも直さず神前の供物です。従つて食物を「たべる」といつかり言つたのでは、私どもの食事の氣分が表はされません。「さしあげる」意味をふくめた、「いたゞく」といふ言葉を、文字通りに使つて、むしろやゝ近い表現となります。

この食事を人と共にし、この氣分を人と味ふほどの貴い快樂があるでせうか。

一しよに一杯の茶を啜り、一しよに一椀の飯を食するとき、人と人との、その中心から融け合ふのは、決して理由なしではありません。この場合に、一とつまみの鹽も非常なご馳走となり、一口の水も葡萄の美酒に勝ることのある經驗から推して、クリストが婚禮の宴で、水を祈つて酒に變へ、五つのパンを五千人に分けて餘つたといふ記事は、形からいへば誇張した比喩でせうが、値うちに於て正に事實であらうと信せられます。

### 三九、食事の用意

食事が既にこのやうなものであれば、決してやだらにすべきではありません。強いるべきでもなければ、吝むべきでもありません。一粒一滴もゆるがせにしないのは、世にいふ功利的節約のためのやうな、輕々しいことでない。食物の性質上、私どもの心持ちの上から、自然にさうでなくてはならないのです。普通の科學以上の、更に高くして精しい科學的判斷を以て、最も適當な取扱ひをすることによ



つて、始めてこの性質、この心持が實効としてあらはれます。

前にのべたやうに、最も手近かな、簡易な物の中に、最も痛切な、深刻な實用と享樂、或は道德と藝術とを具体的に綜合したものとて、食事以上のものはないと言つていゝのであるが、交際的手段としての食事は、殊に普通の意味の「必要」といふこと以外の、享樂的、藝術的要素を主としてゐるために、遊戯的、又は利用的の惡手段に陥り易く、従つて又だらしなく、不規律になり易いのです。それだけ道德的良心の銳利と、一層科學的判斷の精確とを要します。「そんなことでは興がさめる」といふ人があるなら、それは不深切な人と言はなくてはなりません。興をさますのでなく、眞に興に酔ふために必要なのです。

ただ珍しい材料を擇び、ただ美味にのみ調理し、たゞ分量を多く並べるのは、動物園の御馳走といふものであつて、人間社會の御馳走ではありません。豚はそれだけで満足するでせう、人間は満足しません。人格として生きる、即ち意味の

世界、精神の世界、值うちの世界に生きる人間は、文化的の食事、即ち意味の食事、精神の食事、值うちの食事に於て、始めて喜びます。

ちかごろ調理にも、美味の工夫ばかりでなく、材料、配合、方法、分量の上に、營養價とか熱量とか、いろ／＼科學的考慮が加へられるやうになつたのは、喜ぶべきことですが、しかしそれだけでは、まだ自然主義の境界を脱し得ないものです。食卓の飾りや、服装や、話題や、給仕のしかたなどに、貴族的な藝術趣味を加へるのを文化的の食事といふ人なごもありますが、それも文化の本旨ではありません。そんなことよりも、もつと大切なのは人間味です。高い精神へのあくがれから出た、人を悦ばせ樂ませようといふ眞情です。それが充ちてさへ居れば、すべてはやがてそこから生まれて來ませう。材料は番茶一杯で結構なのです。

さう言つて、動機さへよければ、あとはごうでもいゝといふのではありません。善なる動機が、必ずしも善なる結果を生むとは限りませんから、食事を、そ



の場合に適當させて、美しい眞情を貴い享樂の現實にまで結果させるために、深切な科學的の判斷の働きを、たえず實行の過程に加へる必要——供するものも、受けるものも——があります。交際、即ち人格と人格との融合のための食事には、方法資料を媒介として、一つの意義精神の世界を開く深切が、常になくはなりません。

#### 四〇、社交談話とむだ話

社交の最も直接的な、最も廣い手段は談話です。贈物や食事は無くならないものでないが、談話はなくてはならないものです。もちろん個人の自由交際に於ては、これすらなくてはならないものといへますまい。エマソンが始めてカーライルを訪問したとき、ストーブの前でタバコを一本づゝふかし合つたまゝ、双方一言もものを言はずに別れて、それで双方大へん満足したそうですから、或る場合には言葉も必要ではありませんが、しかし普通の社交機關としては、談話が不可欠な

要素といへるでせう。

わが國の人の社交のまづいのは、談話がへたなためだといふ人があります。私の考へでは、もし果してわが國の人が、社交も談話も下手であるとすれば、その間に因果關係があるのではなく、同一原因から來た併行の二つの結果であるのです。わが國の家庭は親子關係を中軸として組織されたもので、夫婦關係を本にしてゐる西洋と違ふ要點がそこにあると、多くの人が言つてゐるのもわかるやうに、わが社會一般が、從來大体に於て縦の關係、即ち上下の階級を本にして組織されてゐる。而て上下の關係は主として命令と服従とを必要とし、平等の位地に於ける、民衆的な合議を必要としない。これが社交をも、談話をも發達させなかつた原因であらうといふ憶斷です。

しかし談話の巧拙の批判、その原因如何の探究は暫く置くとして、實際私どもの經驗する社交には「むだ話」が多いやうに思はれます。社交上の「むだ話」とは、



もちろん狭義の「實益」のないことを意味するのではありません。社交の精神を發揮しない、社交の効果をあげ得ない談話といふことを意味します。それによつて明るく、暖かく、柔らかく、潤つた空氣情調を作り出して、その韻律的な流動、交響的な諧調の中に、全員を融和させ、内面的統一を、社會感情の自由な享樂によつて成就するやうな、要素の乏しいことを意味します。少くも何等かの値うちを持つてゐて、共通の意識、共通的情操に訴へない、ただ無用に鼓膜を打つだけの談話を意味します。

澤山の品物をならべただけでは、眞の御馳走にならないと同様、口數が多いからとて、社交の効果をば奏しません。外の場合と同じことで、人間が「話す」といふことは、「善く話す」ことであるはずで、「眞を、善を、美を、眞に、善に、美に話す」ことであるはずで、この精神から出たものでない、砂利をバラまいたやうなたゞの話は、犬が吠え、鶏が啼くと同じことで、自然現象の噪音に過ぎま

せんから、人の胸に何の響きもない、輕蔑し、排斥すべきものに屬します。そんな談話の多いより、沈黙の方がましです。そんな談話者に出逢つたら、とり合はな

#### 四一、騷擾と修羅劇

教養の乏しい婦人の談話には、殊に「むだ話」の分量が多いやうに聽かれます。さしさわりのない、上品な世間話ならまだいゝのですが、しばしば甚しく主觀的性質を帯びてゐるのです。箸が落ちたの、すべつたのといふ、無意味、な箇所散漫な羅列でも、事實を傳へるなら、まだ許せますが、一言目には「私は」「私だつたら」「私など」と來る。口に出さなくても氣持ちに含まれる。従つて「我れ」に對立する彼れがある。而もその「彼れ」は、是非とも味方が敵かでない承知しない。そこで態度は切迫し、感情は昂奮し、材料は個々他人の偶然な言動で、内容は主觀的な、感情本位の似而非批評、それを成立たせるに都合のいゝ材料だけが拾ひ